

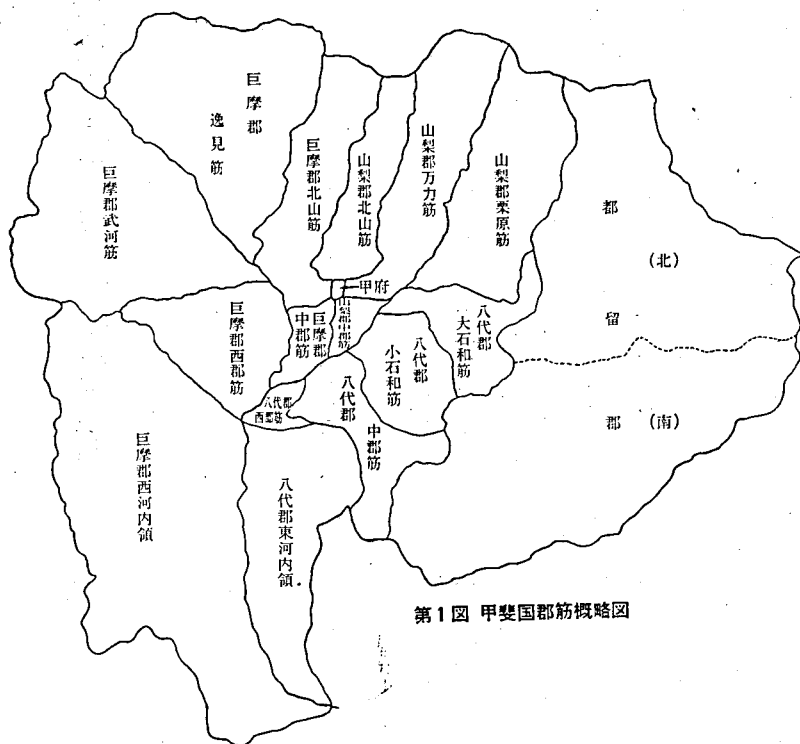


## 天保甲州郡内騒動の諸断面

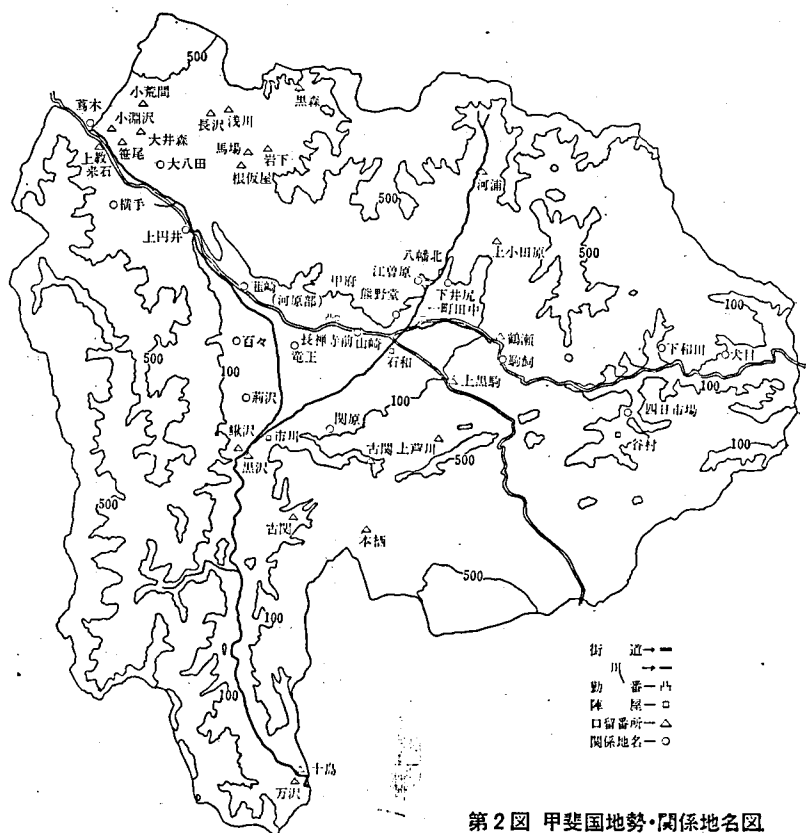
藤 村 潤 一 郎

甲斐国では、天保七年の天候不順は米穀諸作不熟となり、連年の凶作と相まって、八月一七日に都留郡上谷村で打毀が起った。これは鎮庄されたが、同月二〇日付谷村役所の触には「当郡村々之者党を結、愚昧之者江申進メ、海道筋鶴瀬駒飼迄押込、穀物商ひ候者共を打毀可申と沙汰専相聞<sup>(1)</sup>」としている。その二〇日に都留郡下和田村武七事次左衛門と大月宿兵助が頭取となつて、都留郡に一揆が起こり、甲斐国一円に拡大し同二五日に至る大騒動となつた。天保一〇年菊佐七十三翁「甲斐一揆騒動実録」にはこれについて、八月「十七八日頃より、国中之老男安心ハなく、誠ニ往古戦国之如く心得、薄氷を踏心地ニ而、山谷へ隠れんと一国中の騒ぎ大方ならず、外々之国の騒動ト違イ、此度之儀ハ皆押込強盜之類ニ而、国中一統ニ渡シ步行、ケ様之義ハ是迄余国ニハ無之、誠ニ前代未聞之事共也（中略）、九月七日八日頃漸々国中一統安堵いたし候<sup>(2)</sup>」と前後二〇日余の社会不安を訴えている。

この騒動は近世の百姓一揆のなかでも、時期、規模において目立つものの一つである。<sup>(3)</sup>既に手塚寿男氏のすぐれた業績があり、有泉貞夫氏の幕末甲州の政治的動向のなかでの位置付けなど、多くの研究がある。<sup>(4)</sup>本稿はこれら先学の業績に従いながら、若干の史料紹介を行なうものである。



第1図 甲斐国郡筋概略図



第2圖 甲斐国地勢・關係地名圖

## 一 甲斐の地形と支配

文化一一年叙「甲斐国志」<sup>(7)</sup>によると、国高は三〇万六九八石壹斗四升五合四勺九才で、その内容は第一表の通りになる。集計の数字は前記国高と合致せず、男女人口の合計は人口の集計と合致しないが其儘にした。甲州は郡筋に分かれているが、第一図はその概略を示したものである。第二図は地形と本稿で取扱う地名のうち主なものを示した。郡の区劃は現在のそれと大略一致する。明治一一年の「郡政改制の趣旨」<sup>(8)</sup>によると、甲斐国の地勢は「全体山間ノ土地ニシテ四面皆山嶽層重、中央僅カニ平夷ノ地ヲ余スノミニ付、村落大概山腹又ハ溪畔ニ散在シ、隣村ノ交通ト雖モ、数多ノ山谷ヲ跋涉セサレハ容易相往來スルヲ得サルノ場処不尠」と説明し、山梨郡は「村落半ハ平地ニ属スト雖モ、半ハ山間ニ散在スルヲ以テ、戸口ニ比例スレハ土地広濶ニ過ギ、且ツ其東部ニ位置スル処ヲ從來東郡ト唱ヘ、西郡ト人情風土ヲ異ニセリ」、八代郡は「其地勢東ニ起リ西南ニ流延シ、其形体狹長ニシテ恰モ帶狀ヲ為セリ、而メ村落或ハ江畔ニ沿ヒ或ハ山間ニ散在シ、多ク山壑ニ阻隔セラル、且ツ其南部ニ位スル処ヲ河内領ト唱ヘ自ラ一部落ヲナセリ」、そして巨摩郡は「第一ノ大郡ニシテ戸口段別亦随テ多ク、其地勢難易錯雜スト雖モ概シテ土地広濶ニ過ギ、施政尤モ便宜ヲ得ス、且ツ從來辺見、武川、西郡、河内等ノ称呼アリテ、各自ラ部落ヲナスモノ、如シ」、最後に都留郡は「尤モ山間ノ土地ニシテ村落悉ク山谷ノ間ニ散在ス、而メ全部ノ中央ニ於テ高山東西ニ連聳シテ、地勢自ラ南北ニ分隔」としている。本稿では都留郡を便宜上明治以後の南、北両分に従って表示した。

つぎに寛政年間の甲斐国の支配は第二表の通りである。<sup>(9)</sup> 預としたのは当分御預り所の事で、ここでも二六カ村甲斐国志の村数より多いから相給がある。この相給は年代により変化がある。田安領の場合天保三年に田安家の関東の領知が上知されて、替地の結果四万八千石余、一〇四カ村になった。<sup>(10)</sup> 天保期の支配関係としては甲府勤番は追手方支配

第1表 文化年間甲斐國高人口等表

郡	筋	高	村	戸数	人口	男	女	馬	牛
山梨	万力	23,134.2430	49	4,260	15,961	7,969	7,992	511	6
"	栗原	28,990.2462	53	5,510	19,986	10,048	9,938	461	2
八代	大石和	21,674.1773	44	3,024	11,666	5,891	5,775	206	
"	小石和	21,473.26309	40	2,826	10,733	5,307	5,426	155	
"	中郡	11,398.9231	30	2,707	10,643	5,367	5,276	314	
巨摩	中郡	28,539.9390	53	2,404	9,782	4,611	5,171	109	
山梨	中郡	14,432.3310	25	886	3,910	1,925	1,985	59	
"	北山	11,424.7420	21	1,435	4,924	2,403	2,521	170	9
巨摩	北山	21,798.8930	57	3,194	12,321	5,989	6,332	542	171
"	逸見	33,225.2390	61	7,273	29,601	14,892	14,709	2,779	158
"	武河	15,218.0400	39	2,695	10,628	5,270	5,358	703	667
"	西郡	33,581.9170	66	7,375	32,432	15,899	16,533	357	456
八代	西郡	5,314.3730	7	2,054	8,587	4,255	4,332	122	2
巨摩	西河内領	9,163.1950	63	5,086	22,718	11,467	11,251	770	6
八代	東河内領	6,716.9690	59	3,247	14,962	7,644	7,318	464	
都留		20,911.6685	111	13,746	62,961	32,115	30,856	3,896	7
甲府			49	2,059	9,566	4,873	4,693		
合	計	306,998.15919	778 町 49	489,781	291,381	145,925	145,466	11,618	1,484

第2表 寛政期支配別表

支配	石高	村数	石高	村数
石和	64,228	205	20.1	25.5
石和預	14,125	22	4.4	2.7
甲府	84,829	247	23.5	30.7
甲府預	32,094	9	1.5	1.1
市川	74,876	164	26.6	20.4
市川預	4,822	67	10.1	8.3
田安領	30,041	63	9.4	7.8
清水領	14,149	27	4.4	3.4
合計	319,164	804	100.0	99.9

永見伊勢守、山手方支配戸田下総守、つぎに甲府代官所（甲府長禪寺前）代官井上十左衛門、石和代官所（八代郡大石和郡筋石和宿）井谷村出張（郡留郡谷村）代官西村貞太郎、市川代官所（八代郡西郡筋市川大門村）代官山口鉄五郎、そして田安領（山梨郡栗原筋一町田中村）代官飯野孫三郎、清水領（山梨郡万力筋八幡北村）である。前記の「甲斐一揆騒動実録」には甲府勤番支配地方二千石、甲府代官所凡一〇万石、石和代官所凡五万石、同谷村出張凡二万八千石、市川代官所凡五万石、田安領凡五万石、清水家凡二万石、寺社領凡三千八百石としている。<sup>(11)</sup>考証の余地があるが参考迄に記しておく。

これら各支配の法制史的研究については、平松義郎氏のすぐれた業績があるので、これを中心として考える事にする。ただ不勉強のため氏の研究成果を曲解していないかを虞れる。<sup>(12)</sup>

平松氏によると甲府勤番支配は「甲府城の警備隊たる甲府勤番を支配する長官に相当するもので、二名、甲府に在勤したが、併せて甲府の町の民政裁判に任じ」<sup>(13)</sup>その手限吟味は「支配場である甲府町方に関連のない事件でも、盗犯のときは、これを逮捕したならば、甲州内、少なくとも甲府周辺あるいは甲州内の御料の者を呼出し吟味し」<sup>(14)</sup>、その手限仕置は入墨以下だけで、<sup>(15)</sup>甲府の特殊事情から「御目見以上の武士、すなわち、旗本に対しても、伺を経て駿府目付の立合を求め、勤番支配兩人で吟味をなす―仕置は何う―ことをえた」<sup>(16)</sup>とされている。

つぎに「柳宮補任」巻之二十は甲府勤番頭について「享保九辰七月四日始而武人被仰付、御役知千石、遠国奉行上座被仰付、小普請百人宛武百人属ス、組九組ヨリ<sup>(17)</sup>被<sup>(18)</sup>人、与力甘騎、同心五拾人宛」としている。恐らく全体で五〇〇人は越えないであろう。勤番支配の役知は「甲斐国志」によると、山手方が山梨郡万力筋別田村一三四石九斗七升五合、同郡栗原筋竹森村五〇二石四斗四合、八代郡小石和筋南八代村三三七石、合計九七四石三斗八升一合、追手方は山梨郡万力筋上塩後村三三〇石、同郡栗原筋小佐手村六七〇石、合計一〇〇〇万石である。いずれも相給であり、相手は

一定していない。

代官には下級の旗本が任ぜられ、配下で中核をなす者は手附、手代である。平松氏によると「これら吏員は江戸および任地に分かれ、公事方と地方とに分課、執務するのであるが、一代官について、その数は二十人弱、これに若干の下僚、雑役夫の類が付属していたが、総数は、三、四十人に過ぎない。これだけの小勢で、五万石ないし十万石の地の統治を行うのであるから、能率的といわねばならないが、警備、軍事力は貧弱を免れなかった<sup>(18)</sup>。そして代官の吟味権は「火附盜賊改を別とすれば、幕府諸役所中最も狭いものであって、原則として支配所だけに限られ、他の他支配に及ばない。従って、他領他支配引合の事件は手限吟味権を超えた。しかもその刑罰権のうち、仕置の手限に属すべき権限は原則としてなかった。支配所限の事件を勘定奉行の全面的な統制のもとに処罰することが、代官の裁判官としての本務であった<sup>(20)</sup>」のであり、手限仕置権は軽い博奕罪以外はないとしている<sup>(21)</sup>。

さて山梨郡栗原筋下井尻村依田家は石和陣屋に年始に行くのが恒例であるが、天保二年依田氏「辛卯日記帳」によると代官一、元メ手附一、公事方手附二、手附手代一、加判手代一、手代書役一、手代三、門番一、合計一一名がみえている。天保期甲斐国各代官所の構成については不明のため、鈴木寿氏が解釈された嘉永六年「県令集覧<sup>(23)</sup>」による甲斐国分は次ぎの通りである。最初は惣数で、次の括弧内は手附手代合計数を示し、以下はその内訳である。

1 市川代官所 代官一、手附八、手代一四、（江戸詰一一）手附三、手附元メ二、手代六、（陣屋詰一一）手附三、手代六、手代元メ一、手代加判公事方一

2 石和代官所 代官一、手附一一、手代八、（江戸詰七）手附二、手附元メ一、手附加判公事方一、手代三、（陣屋詰八）手附四、手代二、手代元メ一、手代加判公事方一、（出張陣屋詰四）手附二、手附元メ公事方一、手代一

3 甲府代官所 代官一、手附五、手代一二（江戸詰八）手附二、手附元メ一、手代四、手代元メ一、（陣屋詰九）手



附元ノ一、手附加判公事方一、手代六、手代加判一

従つて甲斐国に居るのは四二名と若干の雑役夫である。

代官に關連して当分御預り所がある。これについては天明六年に勘定奉行、同吟味役に対して

都而御代官勤方出精之精功を以、支配所高増地被<sup>二</sup>仰付<sup>一</sup>、又は其最寄にて当分御預り所被<sup>二</sup>仰付<sup>一</sup>候事、諸入用米金銀支配所高に應じ被<sup>二</sup>下置<sup>一</sup>候、（中略）当分御預り所之儀も、老万石已下五千石已上之御預り御代官老人にて口々支配いたし、老万石高之諸入用受取候而は、不益之諸入用被<sup>二</sup>下候筋にも相当候間、（中略）御預ケ所之儀も子細も有<sup>レ</sup>之者格別、可成丈勘弁いたし御代官所高へ割込、不益之諸入用不<sup>二</sup>相渡<sup>一</sup>様向後可<sup>レ</sup>被<sup>二</sup>相改<sup>一</sup>候<sup>（23）</sup>（下略）とある。これ丈で云々する事は無理だが、恐らく代官支配並に取扱つてよいのではあるまいか。

最後に田安・清水両卿領知について平松氏は、公法的支配權につき「御三卿の家臣ないし家政機關の首脳部は幕府がこれを任命し（中略）、その領知が極めて分散していた<sup>（25）</sup>」点を指摘し、刑罰權は「一応大名に關する原則に則つてはいたものの、御料を幕府の役人が支配する場合に類した法制が混在しているのであって、いわば、大名の領分と幕府の御料との中間的なもの<sup>（26）</sup>」である。「原則として御三卿領知は私領に準じて取扱わるべきものであった<sup>（27）</sup>」が大名領と異なる特則があり、一つは上方、中国地方の領知について「支配機關の不備な御三卿領知に關し、『遠路』を理由として、御料に準ずる特例を認容した<sup>（28）</sup>」事で、その一例に明和六年上方筋三卿領知での百姓一揆に「近隣の幕府代官が主となつて近境諸藩に赴援を要請する<sup>（29）</sup>」例を挙げている。特則の第二は關東甲州筋の領知につき「一領限の事件であっても『重料』に該るものは、家老より老中に吟味願を出し、幕府によって裁判処刑あらんことを請うことが行われ<sup>（30）</sup>」た点<sup>（30）</sup>」を指摘している。

この兩卿の陣屋構成であるが、前記下井尻村依田家は天保四年以後石和代官所から田安領に領知替のため一町田中

村の陣屋に年始に行くが、同家の「日記」により再構成すると、代官一、勘定二、支配勘定二、手代二、同心二、門番一の合計一〇名で、勘定と支配勘定は詰合方として幕領の手附に当ると推測される。清水家の陣屋については不明であるが、恐らく田安家の場合よりは人数は少ないのではなからうか。

以上によって甲斐国一円では、支配機構につながる武士は五、六百名と推測され、それが二九万人余を支配している訳である。

## 二 甲斐国御取締出役

この様な支配関係の所に、近世後期には無宿が社会問題として登場する。「召捕者取斗並甲斐国御取締御留置」のなかに甲斐国御取締一件として含められている項がある。これによると、天保五年八月勘定奉行宛甲府・石和・市川代官連名の「無宿共捕之儀ニ付取斗方伺書」は、文化一一戌年関東筋無宿悪党取締の結果、甲州は「武州上州江引続信州其外国々引纏居、右国々々無宿悪党共大勢入込、近來別而増長」した状態にあり、「私共支配所之儀、一村毎他支配他領入交有之候間、銘々支配所限ニ而召捕候様ニ而者進も難行届、別而当春以來村々盜難多く、追々増長いたし、右は全入込候無宿共仕業」であるから、「折々銘々手附手付共差出、國中他支配并甲府勤番支配所田安殿宮内卿領知、兩領知之無差別廻村為致、右弊之悪党共見懸次第召捕、且支配所百姓町人共長脇差を不帶様厚世話いたし、其上不相用ものハ外罪科之有無ニ不拘、是又召捕一同吟味相伺候様仕度」く、その際の出役手附手代の手当止宿米代木銭は新規支出でなく代官手限にする。そのため「他支配并甲府勤番支配所田安殿宮内卿領知、支配所同様木銭米代」でする計画である。勘定奉行内藤隼人正矩佳の附札によると許可の上、甲府勤番支配と兩卿家老に其旨を申達している。このうち甲府勤番の場合について九月には「甲府勤番支配所と申場所は甲府市中ニ限り候儀ニ而、勤番支配在住之場

所ニ有之、御役知は私共支配所江入会、四五ヶ村も有之候ニ付、甲府市中之儀者勤番支配被任置、御役知村々は他支配井両御領知同様」の廻村としたい旨を願ひ、曾我豊後守助弼の附紙は「御役知而已外私領同様廻村」としている。

これより先き、八月には同年春以来召捕の無宿で格別重仕置になる者は見当らず、彼等が吟味詰伺の上で追放以下の仕置だと、再び帰えって来る可能性があるので、天保三年石和代官に仰渡の例により、「良民之害ニ相成候ものは人足寄場又は佐州水替人足ニ被差遣候様」願出たが、一〇月豊後守附札は一般にはその様な事は出来ないが「格別手放兼候ものハ、其次第二寄夫々江差遣候」としている。<sup>34)</sup>

さらに一〇月には羽倉外記、大原四郎左衛門、井上五郎左衛門が信州支配の際に信濃国御取締につき、文政十一年に何のうえ下知になった例に従ひ、無宿召捕のとき他領他支配村方引合を処理することを内藤隼人正は許可している。

つぎに無宿と博突の関係であるが、同年八月無宿盗賊の引合のうち、石和代官所で無宿が博突をして、その手合に加はった百姓につき、「引合ニ呼出其品ニ寄入牢手鎖等申付、中ニは軽キ博突忝度又者忝度位之手合ニ而、一件落着引合罷出候而者、其もの、親類組合村役人共迄も一統及迷惑、殊ニ盗物一条者所々引合等多悉吟味手聞取、御下知済一件落着迄軽キ博突引合之もの共を為慎置候而者、実々村々難儀之筋」であるから、無宿盗賊の差口で博突のみで引合の百姓は「其軽重ニ寄被仰渡之趣を以、時日を不移手限ニ而御仕置申付、其段盗賊吟味書之内江朱書を以申上候様仕度」くとしている。これは代官手限仕置に博突が当る事と、恐らく博突の流行に閉口したからである。<sup>35)</sup>九月豊後守附札は「書面無宿悪党共吟味ニ付、引合有宿之分引分御仕置申付候儀は難相成筋ニ有之、尤有宿之分博突いたし候分吟味次第ニ寄、一旦は入牢申付候共糾之上、手限ニ御仕置可申付程之ものを、当分之内手鎖等不申付村預ニいたし置、一件吟味中詰可被相伺候」としている。

これらの経緯があつて、八月には三代官から勤番支配に、一〇月には三代官所手附手代から田安清水両卿の詰合に取締出役について通知している。そして石和代官所は次ぎの触書を一〇月に出している。

近来無宿共多入込候趣相聞、別而當春以来村々盜難多、其上長脇差を帶歩行候もの有之趣ニ付、取締方之儀三分申合出役差出、田安殿宮内卿殿領知勤番支配御役知之無差別國中廻村為致、怪敷もの見懸次第召捕、吟味詰可相伺旨被仰渡候ニ付、申合時々出役差出候条得其意、外二分出役廻村之節も自他之無差別取締可致筈ニ付、村役人共格別入念取締方可致候、尤休泊之節は木錢米代相払候積ニ付、所有合之品を以一汁菜ニ相賄、馳走ケ間敷義決而致間敷候、廻状村下令請印、早々順達留村々可相返もの也

午十月 石和御役所

つぎに天保九年頃の山口鉄五郎元手代葉山孫三郎「甲斐国惡例仕癖申上候書付」<sup>(36)</sup>によって代官側での事情をみると、天保四年市川代官所手代葉山孫三郎は「役所ニ而取扱候書類一覽いたし候処、右文言騒立と申事書面毎ニも御座候」有様なので、同意見の石和代官所公事方手代山下左内と共に関東同様の御取締が必要と考えた。山下がこの点について甲府代官吉川栄左衛門に打診した処、「御同人様ニは年来石和甲府両陣屋御勤役中人氣をも難見極、昨今之山口思付候逆同意之伺は御断之由、表向は夫となく当分御相談調兼候趣」であつた。処が同年江戸大火のため惡党が郡内領に入り、吉川が甲府で死亡したので、石和代官は「御支配所江入込居候惡党共捕方ニ付、他支配江逃去候節取逃之御趣意戻り候を御いとひ被成、御勘弁中」であつた事もあり、甲府代官は表向、実は石和代官が筆頭になり取締出役を願出る事にした。その際文政九年から越後代官所でも同様の事が実施されていたから、<sup>(37)</sup>「御趣意御書物は、越後国三分ニ而相伺御下知済之例を以相伺候得共、甲州三分は一同在陣場所故」江戸元ノ三人が奉行所に向い談じている。

葉山の書付には「八州同様別段御取締出役之ものニ而も被差遣候ハ、」とあるから、これは関東取締出役とは異な

り手附手代の臨時の仕事である。<sup>(38)</sup>しかし甲斐国御取締出役はこれと類似のものが越後・信濃にあるから、関東の政治的外壁の地域における一連の政策の一環として考えねばならない。<sup>(39)</sup>

### 三 主として代官関係史料による概況

甲府代官井上十左衛門関係史料について収録しているのは次ぎのものである。

(一)「甲州村々百姓騒立一件御届書并落着被仰渡」(信齋叢書七所収)、これは甲府町年寄坂田家の編纂したものである。<sup>(40)</sup>

(二)「甲斐国民起奮記」、竹川義徳氏が収集したもので、二丁表に「竜王村窪田氏蔵書印」という判が捺してある。<sup>(41)</sup>

(三)「浮世の有様」巻之五

(四)「甲州一揆注進」<sup>(42)</sup>

(五)伊豆韮山代官江川家文書

これらの史料を対比すると同一内容の申上書付が見られるので、一応前記の目的に使用する事は差支えないと思はれる。

八月二一日に甲府代官所では石和陣屋に押寄せる風聞が入った。当時石和代官は陣着していなかった<sup>(43)</sup>ので、手附に石和の情報を聞にやった。それによると、同月一四日に都留郡上・下谷村で米商六軒の打毀しがあり、一旦は鎮圧したが、下和田村犬目宿其外の者が二千人程集り、二一日には鶴瀬口留番所を押通り、駒飼宿で米屋二、三軒を打毀し、田安領で行動しているとの事であった。

一揆は「村々へ徒党の者共押懸け、一味不致者共は打殺し、又は可焼弘旨申威候に付、無扨村々人数差出候得共、

頭取体の者帳面記し、右人数を先立村々米商・質屋渡世の者居宅打毀、右の者共食事手当の儀は、村々の内身許宜しき者共選申談」じている。二二日には田安陣屋元の一町田中村を打毀したので、石和代官の要請により甲府代官は勸番にかけ合の上、手附手代を加勢として多人数赴かせた。しかし同日夜には甲府代官領から甲府に及びそうになったので過半を引揚げた。石和では一揆が再び押寄せ、八代郡村々から二三日朝には甲府町方に及びそうになり、山梨郡板折・板垣村で「私手附手代、足輕共多人数差出、穢多非人并村の人等も大勢寄集り」<sup>(45)</sup>防いだが突破され、甲府で打毀があった。ついに信州高島藩諏訪伊勢守に出兵を求めたが、「町方は勤番支配永見伊勢守戸田下総守組之者罷出、在方は私手附共差出徒党及狼藉候者共相鎮」たので、同日夜一旦は諏訪伊勢守に人数差向は断った。そして「甲府町人は勿論在方私代官所村々江も申渡、獵師鉄炮引上乱妨之者手当り玉込鉄炮を以打殺し、手附手代足輕共義も銘々罷出徒党之者共切捨候様申渡」した。その時点では一揆の構成を最初は米穀買占者に対する村々百姓の集合、ついで「無類の惡徒共大勢打加り総人数六七百人、夜に入り二三千人程にも相成の由、手分に白旗赤旗并目印様の物打立て、先手統手等を分け太鼓鐘を打ち竹貝を吹立、重立候者共は帶刀拔身等を取携狼藉に及び、中々以手余候体に有之候、捨置候へば猶々人数加り何様の大事可差起も難計」と見ている。

散乱した一揆は翌二四日には活動を再開し、甲府も問題になって来たので、「人数差向方伊勢守方江掛合早速手附手代足輕共村々江多人数差出、狼藉之者共召捕、私陣屋固之儀も夫々備置」き、再び諏訪伊勢守に出兵を求めた。高島藩勢は二四日に出發、二五日に巨摩郡逸見筋韭崎に到着し、二六日には一番手三三〇〇三九〇人は同郡北山筋竜王村に、二番手二三〇余人は同郡武河筋円井村迄進出した。

この間一揆は信州方面に向かったが、頭取共は馬や駕籠に乗り指図している。結局進出できず引返して来た処を、甲府代官所の手附手代に多人数が加はり、そのなかには甲斐国惣社御嶺山神主一四人、社番一一人も参加しているが、

巨摩郡大八田村附近で「徒党の者共拔身を持ち手向ひ、鉄炮を打懸候に付」、討手も鉄炮、竹槍、棒で追詰め「即死并深手之者共何方之者共不相知死骸は仮埋申付」け、一七〇余人を捕えた。そのなかには「頭取并差続又は悪党共ニ被威無掟付添歩行候者共も有之」とみている。押収した武器は刀脇指拔身六〇余振、鉄炮一挺、斧五〇、鎧二、太鼓一、妙ばち三、其外に十手様の物となっている。残りの者は逃去った。

同月二七日に高島藩諏訪伊勢守が井上十左衛門の二四日付要請のため甲州葦崎出兵を幕府に届けた際に、「私領分境江も家来差出置、押来候ハ、取鎮候様申付置候、若此上領分江押来及狼藉候は利害申聞候而も不相用、不法相働難取鎮候は鉄炮ニ而打払、品ニ寄玉込相用候而も苦ケ間敷候哉」と伺い、「可為何之通候、時宜ニ寄玉込をも相用候様可被致候」と附札がある。

二八日には高島藩諏訪伊勢守、高遠藩内藤大和守、沼津藩水野出羽守に各々「甲州最寄之儀ニ付早々人数差出取鎮メ、若手ニ余り候ハ、打払切捨候而も不苦候候」旨が命ぜられている。前述の高島藩は二六、七日迄竜王村に滞在し、二八日同地を出発して帰っている。円井村の二番手は是より先きに帰藩している。沼津藩は二九日に人数を届出、三二〇余人と人足百人余が九月三日に都留郡四日市場村迄来たが、六日に帰着している。高遠藩については明らかでない。これら以外の甲斐国周辺の国々でも領境の警備が固められたろう。そしてこの騒動は周辺諸藩にも大きな影響を与えたと思われる。即ち九月一日に内藤大和守家来は近隣の者が領分に押寄せた際に、穩便に執計らい、つぎに打払、ついで玉込鉄炮の順で対処する事を、遠国であるから「時宜ニ寄玉込相用候而も不苦儀ニ御座候哉」と幕府に伺い「内意之趣時宜ニ寄玉込をも相用不苦候事」と許可を得ている。

これより先き幕府に一揆の勃発を最初に報告したのは、八月二五日明六時に甲州富士神主小河原頼母であり、彼は御用番松平和泉守に

甲州都留山梨八代三郡百姓共壹万人程致徒党、鉄炮三百挺程ニ而村々打毀、近々甲府町方江も乱入可仕様子御座候間、御注進申上候

と提出した。一揆の進路等については、天保七年八月甲州境夏秋水配御用詰合中の御普請役田中金一、萩野幸蔵、森戸十郎、同見習新井甚之丞、山口厳次「甲州都留郡内領之者共騒立村々及乱妨候一件風聞承候趣申上候」によると、発端は犬目宿兵助、下和田村武七が頭取で、多人数が八月二日に笹子峠を越えて甲州道中の駒飼、勝沼宿に至り打毀す。二二日には其処で三手程に分裂し、多数の者は甲州往還筋を栗原宿、一町田中村（田安陣屋、川中嶋村、熊野堂村、川田村、石和宿（代官所）と進み、途中で身元宜者を打毀す。甲府代官所は騒動が石和に及んだので「支配所之者共召連、獵師鉄炮竹鎗等持参、笛吹川堤迄出張」るが防ぎきれず、酒折村の線まで後退した。一揆は石和宿とその周辺を廻ってから五手に分れ、東郡の村々を打毀す。その一手は往還筋から酒折村に進み、同地で合図して再集合し一万余が甲府に向う。勤番支配は町境迄人数を繰出したが防ぎきれず、結局御城内に引揚げたので、一揆は五手になって甲府を打毀し放火した。二二日の夕方に一揆は甲府から中郡辺に向かい釜無川東岸の西八幡村から竜王村に入り暫時休憩する。同夜八時頃出発して信州往還を韭崎宿、ついで逸見筋村々を経て、山を越えて再び信州往還を台原宿から信州境に及ぶ。

一方東郡中郡在々を打毀した一手は黒沢村から釜無川を渡り、鉢沢村辺から西郡筋に向かって北上し、百々村迄で「敵寄村々大勢申合相防、徒党之者の内五六人切殺、其余は悉退散」し、二四日夕刻には四散した。その際に「敵寄村々ニ而三百人程ツ、取押、支配御代官江差出」している。

甲府打毀の翌二三日甲府代官井上十左衛門は前述の通り高島藩諏訪伊勢守に人数を要請する。五〇〇人程が信州境迄進出した一揆を圧迫して竜王村に至り、二八日に引揚げた。つぎに一揆の人数を笹子峠越の時期で数千人、勝沼宿



で約三千人で、老丁田中村から熊野堂村で「無宿盜賊等加、及乱妨頭取之差図を不請」のため、前記の武七兵助ら五、六百人が二二日夕方引揚ている。甲府押入以後の人数の過半を「無宿盜賊乞食非人等之者」とみている。

以上であるが、後述する通り黒沢から鉢沢に渡河する一手が、その前に市川大門村（代官所）を通っている事には言及していない。

騒動の落着後の吟味について、九月一四付内藤隼人正から石和代官西村貞太郎宛の申渡によると、評定所留役金井伊太夫、日下部七之助が石和陣屋でこれに当り、兩人は最寄の寺院町家に止宿する。吟味差支の際は代官も同様にする。牢屋は陣屋内にないから補理し、入牢人の送迎手鎖縄掛などは石和代官所足輕が当り、手不足の時は甲府・市川代官所足輕を、更に不足の際は雇用する。手鎖羈類は石和代官所分を使用し、不足の時は甲府・市川分を、更に不足の時は縄手鎖を使用する。吟味中、石和代官所の手附手代は評定所留役兩人の差図を受ける事は勿論であるが、定式の仕事もあるから甲府・市川代官所の手附手代も呼寄せ、一同で勤務する事になっている。

なお吟味中に百姓騒立や入牢者、百姓被呼出人が多数で、代官所の人数で警備取締が手不足の際は、高島藩諏訪伊勢守が時宜に応じて人数を出す事になっている。

話が前後するが両評定所留役が到着する迄に、市川代官所手代葉山孫三郎が目立った行動をしている。即ち天保八年九月「葉山孫三郎非分ニ付川内領駕籠訴」<sup>(46)</sup>によると、「其節葉山孫三郎殿甲州支配所江御下り被成、御三郡御取締被仰付、嚴重御取斗等有之趣ニ而も、御代官様元々様を始め、如何様之御取斗被致候而も、誰有而故障申者無之」としている。

これに対する葉山の反論と思われるものに、天保九年頃の「去々申年八月々翌酉年十一月迄私儀市川陣屋詰中取斗候廉々荒増申上置候書取」<sup>(47)</sup>がある。これによると葉山は天保七年八月に出張って被打毀人を見分したが、当時の社会

状勢にもふれ次ぎの様に記るしている。即ち「郡内領百姓は山梨郡熊ノ堂村奥右衛門居宅打こわし夫々引取、巨摩八代三分附支配所村々乱妨ニおよひ候もの共は、無宿又は村々ニ罷在候不当之もの共ニ而、被打毀候家々之諸品盜被取罷在候を急度見極メ候而も、銘々可取戻余力も無之、剩三分役所ニ而可取押手配も不致其儘捨置候間、被打毀候もの共は此上離散可仕哉、又は盗いたし候もの共は常々不当之もの故、かゝる時節は左も有へく、乍去何村之誰は金銀取引もいたし別懇ニも仕り候ものニ而、其身をのがれ度迄ニ多人数之もの焚出しをいたし、悪党共之精力を増シ打こわさせ候は、自身家々江押寄打こわし候道理ニも当り、残念ニも存し江戸表江罷出御稟訴仕候趣悉く騒立、何分被打毀候もの共之人氣一倍ニ相成、いつ可鎮静無御座候」としている。そのため彼は熊野堂村は田安領であるが、天保五年の下知済を理由に奥右衛門関係の質物盜取、乱妨人を石和陣屋で吟味した。その際に被打毀人からの訴は筋違として取上げていない。「難捨置筋は風聞を以召捕」え、また焚出酒食持運人のうちで「居村ハ扱置、三四り之間」運んだ者は召捕えて糺し、さらに市川陣屋で糺明しているが、持運人は他に悪事もないので手鎖宿預である。その結果として少しは社会状勢も治まったとしているが、一方では治まらない者が出来た。

田安・清水領村役人の話で甲府・石和代官所では、「甲斐国御取締御下知一向無之、孫三郎甚不埒之義ニ付、此上支配所江相越右様召捕ものニ而も致し候ハ、孫三郎義を召捕候杯申居候由」とあるのがそれである。

これに対して、彼は「無構取締のため廻村、他支配他領之無差別追々召捕」えて市川陣屋に入牢させ、評定役留役が石和に到着してから書類と共に引渡し、一月下旬迄石和に出張った。いささか独走気味の点もあるように思われるが、甲斐国取締出役は余り巧く運営されていなかったのではあるまいか。

#### 四 甲府町年寄坂田氏のみた騒動

天保七丙申歳「御用日記」<sup>(49)</sup>の八月二二日の条には、「今五ツ半時頃追手御役所へ急御用有之候間罷出候様被仰下候ニ付、即刻与一郎罷出候処、郡内領百姓共徒党致し、去ル廿日頃よ梨、郡内谷村辺打毀、追々所々江も致乱入、昨夜中々東郡辺所々押入打毀及乱妨、町方江押来候様子」とあり、同二五日の条には「今日少々相鎮候ニ付諸御固御引去被仰付町方も一同昼頃々見世相聞人氣相鎮候」とある。この間の事情は「甲州村々百姓騒立一件御届書并落着被仰渡」によると、八月二二日夜、甲府では一揆が石和宿、川田村辺に来て打毀を行なったので、町方も騒立ち甲府代官は山崎を固めた。警備は近在の者丈けでは手薄なので、役人が出張り町方から人歩男のうち三分の一を出して町境惣門台を固めた。翌二三日昼四時頃にその固めを三、四百人が突破した。実勢力は三、四百人だが、外観は彼等の他に近在の者と惣門台、山崎の警備の人数が加わっていたため大勢にみえた。甲府では一三軒程を打毀し、竹原田藤兵衛方<sup>(50)</sup>に放火し七、八軒が類焼している。一揆は甲府を出て二三日夜から二四、五日迄に西郡辺は教来石宿迄、南は駄沢迄迄の重立った富家を打毀し二六日頃に鎮まった。

勤番、三分代官が召捕えた人数は凡五、六百人<sup>(51)</sup>で、一揆の構成については「尤西郡辺ニ至り而は近村之悪者共加り、及乱妨物取ニ成候ニ付、諸々ニ而打殺し死人怪我人数多有之候、右郡内之者共廿二日東郡打毀候節、悪党加り物取ニ成候ニ付思立候意ニ違由申、郡内江引取候由」としている。

再び「御用日記」によると、八月二九日には勤番追手御役所白洲で召捕えられた五六人に御尋があり、九月二日に同様の百姓八一人、無宿二六人の御尋と一同吟味中入牢、僧侶二人に吟味中揚り屋入り仰渡し、翌三日には百姓二人と、入牢人六七人の御尋があり、入牢者のうち一人は申口が認められ吟味中町内預になった。二一日には焚出人の名

前を提出している。同日付で、勤番御役所での吟味は評定所留役に引渡されている。これは三分代官、田安清水領役所で召捕の者も同様である。従つて市川代官所手代葉山孫三郎の申分はちよつとおかしくなるわけである。そして引合人で町方分は「当御役所江御掛合之上呼出ニ相成、吟味申口次第第二寄、町方江も踏込召捕ニ相成候義も可有之旨」の勘定奉行からの掛合が伝えられる。ここにみられる人名などからすると、召捕えられた場所は甲府町中ではない。また百姓が無宿か、同名の者がありきめ難いが、若し百姓だとすればその住地は甲府勤番、甲府・市川代官所、田安領に属する。この勤番役所での調は、甲府町中の盗犯として処理しているのであろうか。

なお「御用留四拾七番」<sup>(52)</sup>によると、十一月一四日に御勘定評定所留役兩人は「町方被打毀候者共場所見分」を行なっている。

再び「甲州村々百姓騒立一件御届書并落着被仰渡」によると、落着後の一二月朔日に四一人<sup>(53)</sup>が石和から江戸に送られている。そのうち一三人が無宿である。頭取目籠に百姓一、無宿二、計三人、植木台乗繩付に百姓二七、無宿一一、計三八人で、百姓二八人の内訳は地域別では山梨郡八、八代四、巨摩一二、都留四であり、支配別では甲府六、石和一〇、市川七、田安三、清水二となっている。護送中は「無宿之分人足式拾八人無賃、於休泊四人老人江番人式人ツ、」であり、三分代官所手代各一人が附添っている。途中の泊りは朔日黒野田、二日上野原、三日駒木野、四日府中五日内藤宿である。彼等は天保九年五月の判決では清水領百姓一人を除いて全員牢死している。刑罰は百姓の場合磔一、死罪二、遠島二四、入墨重追放一、無宿の場合は磔二、死罪五、遠島六となる。

つぎに「国中被打毀候名前」が記るされているが、甲斐国二四四人、信濃国二人、合計二四六人であり、その地域別は第三表の通りである。支配別では勤番三、甲府一九、甲府預二四、石和四五、石和預二四、市川七一、市川預四、田安領四一、清水領一二、不明一、信濃国二となっている。この史料と「甲斐国民起奮記」のなかの「笹籠峠々

第3表 被打毀家数表

郡	筋	家数	
		人	
山梨代摩府明州甲不信合	力原郡	23	
	和石郡	28	
	和石郡	6	
	郡見山河	19	
	郡見山河	19	
	郡見山河	3	
	郡見山河	8	
	郡見山河	37	
	郡見山河	36	
	郡見山河	41	
	計	7	
	計	13	
	計	3	
	計	1	
	計	2	
	計	246	

に「甲州東郡一揆打こわし左之通」「江戸表入口五町之内手始」として打毀が記るされているが、その大部分は重複している。従って打毀は多くても三〇〇件は越えないのではあるまいか。<sup>(56)</sup>

さて天保九戊戌歳從正月至七月「御用日記」<sup>(56)</sup>の五月三日の条には、「打毀候者并焚出し致候者、其外町中家持惣代店子惣代名主、惣而先達而口書差出置候者、外ニ無宿ニ而預ケニ相成候三人之者江被仰渡候義有之候間、一同来ル十日四ツ時迄ニ石和宿江出御代官陣屋江着届」が命ぜられ、翌四日には町中に此旨を触れている。六日には召捕えられ石和で吟味の上、親に預けられていた愛宕町五左衛門悻徳次郎が四日に家出した訴書が提出され、八日には「一昨申年騒立之節店子惣代として罷出候」新青沼町恒兵衛が七日に病死した届書が名主からきた。同日「騒立一件落着過料錢御払ニ相成候ニ付、明九日石和御陣屋江両替屋差出候様、尤其節町役人奥印之相場書持参差出」が命ぜられて、両替屋当番連雀町幸十郎がこれに当たっている。

一〇日には「去ル七日於江戸表落着被仰渡有之」として勤番、代官、口留番所関係者の仰渡があり、「惣町家持店子惣代老宛名主差添、外ニ焚出し致候者拾八人其外之者共」が石和に着届けをし、仰渡をうけ、一日にはこの内容があり、一三日には惣町中過料錢五三〇貫文のうちに、上府中分は凡金二八両であるが、当時上府中は「打統違

西ニ而打壊候村々名前」「甲府々西郡筋逸見筋信州堺迄南ハ畝沢迄」<sup>(57)</sup>と大部分が一致する。その合計は二二八人と九村で、相異の著じるしいのは甲府二七人である。前述「国中被打毀候名前」の甲府の三人は、その前文に二〇軒程が打毀放火類焼としている点と合致しない。また都留郡が全くない点にも問題がある。「甲斐国民起奮記」には上記の他

作、殊ニ前以困窮致罷在」るため、一三日中に取集が不可能である。下府中の身分相応の者に立替を同町名主に依頼したが断わられ、御声掛けを願ひ、「尤上府之者共早々取集返金致候様」との条件で許可されて、一四日に過料銭は納められた。

そして「落着被仰渡候請証文之写」を江戸に進達するため急いで事務を進める事を求められている。

一五日には申年当時三日町名主助左衛門は石和で口書を差出したあと、八酉年四月死亡したので名主過料銭は差出す必要はないが、「其旨支配御役所江相願、御役所々掛合有之候可致旨」が命ぜられる。

二四日には勤番山手御役所で被打毀人一三名、焚出人一九名が、「他国留被仰付置候処、一件落着ニ付他国留御免御構イ無之旨」を仰渡され、堅町栄兵衛父平左衛門には「町内預被仰付置候処、不慎之儀も有之ニ付、急度も可被仰付処、永々々手鎖被仰付ニ付、御咎之不被及御沙汰、町内預御免御構イ無之」と仰渡された。彼は過料銭三貫文の仰渡であるが、これとの関係は不明である。

前述の通り三人の無宿が預けとなっているが、そのうちの西一条町政兵衛に預けられている松本無宿由蔵は過怠手鎖を仰渡された。六月一六日の条に「十二日御免ニ相成候段御届書名主利八持参」とある。預り人との関係は不明である。なお「御用留」<sup>(分)</sup>六月一日の条には「一件ニ付御取上ケニ被成候衣類刀脇差其外雑物共御払ニ相成候間、買請望之者」は朝五時に石和陣屋で品物見届入札する事になっている。

## 五 伊豆菰山代官江川太郎左衛門英竜の行動

天保二年の江川太郎左衛門の支配高は七万二三三四石九斗二升五合二勺で、武蔵、相模、伊豆、駿河の四カ国にわたっている。江川氏が甲斐国を支配したのは、寛政四年に都留郡一万七六二九石余と、同当分御預所八一七石余が知

られている。

騒動の起つた天保七年前後の支配所の状態について、天保八酉年江川役所「御用留」<sup>(58)</sup>にある三月「支配所治り方之儀申上候書付」<sup>(59)</sup>には、

去申年之儀者稀成凶作ニ而、米穀、、、格外高直罷成、私支配所武蔵相模伊豆駿河国困窮、村々窮民可及飢もの不少人数ニ有之、手附手代廻村いたさせ、取締方穀物融通諭方等為仕候儀ニ者候得共、去申八月以来米穀払底高直々事起、相州大磯宿之もの共大勢寄集米屋共打毀、豆州下田町ニ而茂穀屋共を打毀、武州八王子宿ニ而者米穀之儀ニ付騒立打毀之企致し候趣相聞候

とあって、これを吟味して「当時漸穩ニ相成候処、穀物所持之もの共者右様嚴敷取斗候付、此以後打毀様之儀も無之と心得」て固持ちし、「窮民可及騒動者眼前之儀」となり、色々と指導したので八年現在は「先平和ニ相治」まっている。しかし江川支配地のある伊豆、駿河の私領小給所村々は取締が行届かないので

私領村々々騒立支配所内江押移候儀も難斗、既此度私支配所駿州富郡大宮町在私領村々之もの共大勢騒立、右大宮町江押寄候付、召捕置地頭江懸合中ニ有之

とある。従つて甲斐国の騒動が起つた時期には武蔵、伊豆、駿河等も同様の社会状態であつたと考えられる。天保七年九月三河に一揆が起つているから、三河まで拡大して考えてもよいかもしれない。

さて支配所相州津久井県日蓮村役人は、一揆が田安家陣屋迄押寄せている事と、津久井県内え押入り打毀の風聞を荒川番所出役に訴出て<sup>(60)</sup>いる。

英竜の行動を勘定奉行宛書状によりたどると、豆駿州宿村を廻村して、天保七年八月二八日に韭山に帰えつた英竜は二九日に江戸から甲州郡内領騒立の通知を請取っている。二九日付書状で、英竜は自己の支配所関外武相州が取締

不行届とし、ついで騒動について

右躰多人數支配所内江踏込来候を、恐怖而已仕相待罷在候而は不相成候間、私儀直様出立罷越候、時宜ニ寄他支配他領之無之無差別罷越取鎮候心得ニは御座候得共、品ニ寄切捨候儀も可有御座候間此段申上候、私儀在国仕候ハ、豆駿州支配所内者若如何之儀等御座候共、取斗方も可有御座候得共、前条之通武相州支配所江罷越候上は、此上如何可有之哉甚心配仕候、乍然騒立候もの共支配所内へ乱入仕候趣及承候上は、不張越候而は不相濟儀ニ有之候間、出立仕候儀ニ御座候

と所信を述べている。此時には騒動は既に落着いているのだが、当時の情報の速度や支配所内的情勢を考えれば当然の所置だろう。同日付の別の書状では武州八王子宿の件の吟味は取鎮に出立するから奉行所が其筋の者により直接糺す事を求めている。また八月付書状では甲州の情勢について、若し武相州に押寄せて来た節には手代足輕では防禦出来ないので、時期を失せず「取鎮方之儀其筋江兼て御沙汰可被成下置哉」と意見を開陳している。

ついで九月三日付勘定奉行から英竜宛の書状には、小田原藩大久保加賀守に人数を差出させてはとの申越を受取った事を記るし、ついで高島、沼津、高遠藩と甲府勤番が防人数を出し、一先ず制圧した事が甲府代官井上十左衛門から届書が来たので、小田原藩人数の件は見合せと心得る事、そして「右騒立候一件之儀ハ井上十左衛門相心得居候間、此上同人江打合被取斗候様存候」としている。

九月三日付書状では公事方奉行衆に対し、現在地は相州厚木村であり、自分に対する取鎮申越が落ちていた事を了解しており、今後は甲州道中の駒木野、小仏関所を見廻り帰える予定で、八王子の件につき指令を求めている。

翌四日から八日まで繁雑な位に場所引弘につき甲府代官と、勘定奉行とに交信して指令を仰いでいるが、そのなかに小田原藩家老松下良左衛門からの申越として、小田原藩が領内相州村々取締のため人数を繰出している事が知られ



る。英竜は九月八日に津久井県を引払い帰国した。

この間の行動につき、九月一六日付元ノ手代柴鷹助宛家老（元ノ手附カ）松岡正平書状は「風聞迄ニ而押寄候儀も無之相鎮候上者、鉄炮等持参仕免忽ニ出張候様可被思召哉候処懸念仕候」旨を勘定所川路三左衛門に申上げると「武備は右様ニ決而無之、御出張誠ニ速ニ而好所ニ有之、奉行衆ニおいてハ御嘗有之候儀之旨、くり返被仰聞候」とある。

なお天保八年に英竜は齋藤彦九郎と刀剣行商人に扮して甲州を微行したそうである。<sup>(6)</sup>英竜筆「甲州微行図」があり、<sup>(6)</sup>天保九年戌七月手代清水三郎助「内札御用留」の七月二三日の条に、赤坂茶屋で荒物売買の金次郎の嘸として「今度葦山ニ成候と賄路は少しも出来不申、御代官様自身隠密ニ廻り候間、手代衆も油断ハ成り不申、嚴敷可相成と申聞候」と記しているのはこの時の事であろうか、後考にまつ事にする。

つぎに天保八年一〇月には手代齋藤左馬介と小田原藩大橋儀兵衛との書状によると、津久井県と甲州の境を両者で固めてから押登り、谷村陣屋と連絡して郡内の無宿を召捕っている。

天保九戌年江川役所「御用留」によると、五月に江川太郎左衛門、小林藤之助は甲斐国山梨、巨摩、八代、都留郡高一八万六千六百一十四升七合六分九釐を、「右者此度井上十左衛門西村貞太郎小普請入被仰付候ニ付、右両人御代官所当分御預所共其方立会当分御預所ニ被仰付」ている。ついで、同年六月には上記の高のうち六万四千七百九十五斗一升六合（内山梨郡一八二〇三百七十九五、巨摩郡四万五千七百七二）が江川代官所、巨摩郡二万〇四百〇石八斗八升九合が江川当分御預所になる。翌九月には都留郡二万一千二百七十三石八斗七升五合が江川当分御預所になった。

## 六 「落着御請証文」について

イ、史料について

「慎徳院殿御実紀」卷二天保九年五月五日の条に、「此日甲府勤番支配永見伊勢守甲斐国村々騒ぎ立しをりの所置を咎められ職とかれ。小十人山口鎮五郎その甲斐国代官たりしをり。同じ騒乱の事をとがめられ小普請に入れ。共に逼塞せしめらる<sup>(64)</sup>」とある。この際に仰渡された御下知に対する請証文があるが、私がこれ迄にみたものは次ぎのものである。

(一)「天保七申騒立御下知済被仰渡控」(史料館蔵依田家文書)

本史料は甲斐国山梨郡栗原筋下井尻村依田家旧蔵にかかるものである。最初に「差上申一札之事」とあり、「甲州村々騒立人家打毀及乱妨候一件再応御吟味之上左之通被仰渡候」として、百姓・無宿について一〇二カ条ある。つぎに一〇一六八・一〇一〇二条についてのみ請書があり、御勘定御奉行所に宛てている。一〇二カ条は後述の史料と比較すると、本史料の番号で二九・三〇条の間に一項脱落している。各条頭に朱で番号を記しているが、八四条に「本帳八十三也一ツ落候か」とあり、八六・九四条にも朱書しているが、一〇二条には「本帳百一迄也壱つ間違候か」とある。この「本帳」が何様なものか、所蔵者、借用の契機共に現在の処明らかでない。そして一〇二カ条に記されている人名については、一・五七条位迄は村名、無宿の記載を欠いている。一カ条に連名で書かれている場合には屢々人名を脱落している。しかし但書は比較的よく記るされている。本文の一〇二カ条については、余り良質の史料ではない。

つぎに請書の記載は代官所、郡筋村、身分、姓名、刑罰などを記している。刑罰については本文に記していない日数など迄記している。全員の請書でないのが「本帳」のためか、依田家で省略したためかは不明である。

本文・請書に続いて、前と独立して「申渡」があり、代官二人について記るし、ついで手附手代一五人、勤番の与力四人、同心六一人、家来二人と、御番所番人二人の刑罰と人名がある。最後に「当国騒立一件ニ付、重而御嶽

神主江ハ御沙汰有之段被仰渡候」として終る。本史料を依田本と略記する。

(二)「甲騒落去」<sup>(65)</sup>（甲斐叢書）

本史料は広瀬広一・赤岡重樹校訂で、校者によると、山梨県庁蔵本を謄写校訂したものである。原本の所在について確認していない。記載は大略依田本と同じであるが、一〇三カ条でその人名には村名、無宿を比較よく頭註しているが、矢張り脱落している場合が多い。一カ条に多人数の百姓、無宿を列記する場合には、百姓、無宿の順であるが、屢々無宿の註記を脱落してをり、人名も脱落している場合がないではないし、村名の不正確な場合もある。なお人名の下に病死の書入がある場合がある。請書はない。つぎに「申渡之覚」として代官二、勤番支配二、小十人一人があり、さらに御請書として勤番与力同心四六、手附手代四の分があるが、依田本に比較すると仰渡書を載せている。<sup>(66)</sup>

(三)「甲州騒立一件御裁許状」<sup>(67)</sup>（山梨市小原東竹川義徳蔵）

本史料は昭和四三年に、竹川義徳氏から伺った所では、氏が甲府在住時代に古物商から入手し、筆者・原蔵者などは不明である。一〇三カ条あり、依田本と書式は似ているが、人名の右脇に村名、左脇に大病・病死などを朱書している。「甲騒落去」の原本は、恐らく本史料に似たものではないかと推測される。本史料の村名は比較的正確であり、無宿の朱書、人名の脱落も余らない。そして請書はない。つぎに「申渡之覚」と「御請書」があり、「甲騒落去」に比らべると、手附手代一人の御請書と御番所番人の名前・刑罰がある。竹川氏は「甲騒落去は甲州騒立一件御裁許状と同一のもの」としておられる。<sup>(67)</sup>系統は竹川氏の指摘の通り同系統のものであるが、私は寧ろ本史料の方が良質の史料ではないかと思う。本史料を竹川本と略記する。

(四)「甲斐国村々騒立一件落着御請証文写」<sup>(68)</sup>（東京大学法学部法制史資料室蔵）

本史料は東京神田の巖松堂書店から購入されたものである。内容は竹川本と同様であるが一〇三カ条のみである。人名、村名、無宿、刑罰、病死などの他は諸般の事情により精査していないが、一〇三カ条については、本稿でとりあげた史料のうち最も良質の史料ではないかと考えている。一〇三条の最後に「名前略ス」「過料錢合八千五拾四貫四百文也」と記されている。本史料を東大本と略記する。

(甲)「甲州村々騒立一件落着請証文 谷村控」(中央大学歴史学会編「甲斐国都留郡内一揆関係資料」所収)<sup>(68)</sup>

本史料の原本は都留郡朝日馬場村松木家(天保期郡中代)蔵の由であるが、私は原本に当たっていない。一〇三カ条のみで東大本に類似しているが、人名、村名、人数などに可成りの混乱がある。なお末尾に「名前略下」とあり次に

但礫四人内三人牢死 打首拾人不残牢死 遠島三拾八人内三拾六人牢死 入墨重追放式人牢死 入墨中追放老入  
中追放九人 輕追放老入 所払式拾四人 入墨追放九拾九人三拾七人牢死 解読不明 式人 押込三人 盜物代償或ハ  
御取上等之者拾余人 手鎖六拾七人内式拾三人牢死 但四枚五十四 御叱之者凡老万九百九拾人余人 過料錢惣  
合八千五拾四貫四百文

<sup>(70)</sup>とある。過料錢惣額は東大本のそれと一致する。本史料を中大本と略記する。

以上の五史料は同系統の写本であるから、本稿では「甲騒落去」の一〇三カ条と申渡之覚、及び依田本の請書を底本として校合した。本来ならば一〇三カ条は当然東大本を底本にすべきであるが、前記の事情と所在に気付いたのが遅かったため残念であった。<sup>(71)</sup> また稿になった後、内閣文庫蔵「甲騒落去」に気付いた事を遺憾とする。

ロ、庶民、神職僧侶

さて処罰者のうちで百姓、家持について地域別に示したものが第四表である。甲府の町は便宜上村として計算し

処罰者地域別表

30 日 逼 塞	所 払	江戸 拾里 四方 追放	中 追 放	入 墨 中 追 放	入 墨 重 追 放	遠 島	入 墨 敵	入 墨 敵	重 敵	入 墨 重 敵	死 罪	磔	質 関 係	盗 品 関 係	合 計	村
人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人
1	1		5			1	4	9					4	2	59	140
						5	2	6					2		24	161
						2	1	4							4	60
						8	7	3							19	72
	1		5					22					6	2	106	433
1	1					1	3	2	1		1				18	132
						2		4							15	127
							1	1			1				34	45
1								2							7	21
						1									1	12
							1								1	
2	1					4	5	9	1		2				76	337
					1	3	5	3							28	147
						2	3	2							12	188
	1					1	4	3							17	151
7						3	7	8			1			1	70	162
							1	2							14	81
						1		3				1			5	6
	8				1	10	20	21			1	1		1	146	735
	14	1	4			5						1	1	1	63	82
								1							61	74
	14	1	4			5		1				1	1	1	124	156
															21	150
2	24	1	9		1	27	32	53	1		3	2	7	4	473	1,811
				1		15	14	29	2	1	7	2			115	
2	24	1	9	1	1	42	46	82	3	1	10	4	7	4	589	1,811

天保甲州郡内騒動の諸断面(藤村)

第4表 百姓家持

刑罰 在内地	叱		急 度 叱		過料錢 3 文		過料 5 文		過料 錢		30 日 押 込	100 日 押 込	30 日 手 鎖	? 日 手 鎖	50 日 手 鎖
	人	村	人	村	人	村	人	村	人	村	人	人	人	人	人
山梨郡栗原筋	11	46	14	46	6	46				48	2				
万力筋	2	57	1	57	4	57				47			2		
北山筋		20		20		20				20					
中郡筋	1	24	7	24	5	24				24					
合計	14	147	22	147	15	147				139	2		2		
八代郡大石和筋	1	45	6	45	2	44				43					
小石和筋	3	45	5	45		41				41					
中郡筋		15	23	15	5	15				15	1		2		
西郡筋	1	7	2	7	1	7				7					
東河内領		4		4		4				4					
不明															
合計	5	116	36	116	8	111				110	1		2		
巨摩郡中郡筋	3	49	8	49	5	48	1			50					
西郡筋	2	60	1	60		60				68			1		
北山筋		45	5	45		50	3	5		51					
逸見筋	4	48	2	48	2	55	34			59			1		
武河筋		25		25	8	27	3	2		27					
西河内領															
不明		2		2		2				2					
合計	9	229	16	229	15	242	41	7		257			2		
都留郡(北)	10	28	8	28		27	2			27			2		14
(南)		46		46	1	14	1		58	14					
合計	10	74	8	74	1	41	3		58	41			2		14
甲府	16	50	3	50	1	50	1			50					
甲斐国合計	54	616	85	616	40	591	45	7	58	597	2	1	8		14
信濃国筑摩郡													1		
無宿													20	23	1
合計	54	616	85	616	40	591	45	7	58	597	2	1	29	23	15

天保甲州郡内騒動の諸断面（藤村）

二三八

た。郡筋は「甲斐国志」のそれによった。なおこれに松本藩松平丹波守領分信濃国筑摩郡三溝村喜代蔵を附載した。<sup>(72)</sup>

つぎに処罰者のうちの無宿について、その村名を明治一八年内務省地理局編「地名索引」と吉田東伍「大日本地名辞書」によって国郡を考証したものが第五表である。村名は甲斐国にある場合は甲斐、それ以外で同名の村が二カ国以上にある場合には交通上近接している国を採用した。無宿には松本、小諸、追分、水戸、本庄、仙台、富山、高山、岐阜、相州久能村など出身地のはっきりしている者がいる。これらからすれば第五表で一応の傾向を考えてもよいだろうと思う。先ず甲斐国出身と他国出身が大略同数である。甲斐国分は各郡にわたり特定郡に集中していない。無宿に関する御触は安永前後からみえるが、それには関東、特に上州、武蔵から地続きのため甲斐に入る点を指摘している。他国出身者は矢張り関東、信濃、駿河、遠江が大半で、仙台など随分遠い者もいる。

刑罰について、<sup>(73)</sup>百姓と無宿の關係であるが、生命刑では無宿が多く、身体刑では百姓が無宿の倍近い数字である。自由刑の過料銭を除く者は百姓八九、無宿六〇であり、そのうち手鎖は無宿が多く、遠島は百姓が多くなっている。つぎに榮誉刑は百姓のみである。

この時期の百姓と無宿との人口比が不明のため判断が困難だが、両者の關係は、騒動が山梨郡万力筋熊野堂村以後は都留郡の者が引揚げて頭取人に無宿になる点が一般に指摘される事を念頭に置いても、百姓が矢張り混乱した状態のなかで、その場所、置かれた条件のもとで参加して行った事を示している。騒動の終幕になる巨摩郡が他の郡と余り変った数字でない事もこれを示している。ただこの事で、「個人」として参加、処罰されている点に重点を置いて考える事は尚問題がある。一〇三カ条の内容からすれば、矢張り「村」として行動している場合が多い。この村と百姓又は村と階層の問題については、第四表と甲斐国の幕末の農業構造などとの関連で考えるべきであるが、私は幕末期のこれらの事情について研究が及んでいないので後考にまつ事にする。<sup>(74)</sup>



第6表 名主・長百姓刑罰重複表

地 域	支 配	名 主				長 百 姓			
		3 文		5 文		急 度 叱		3 文	
		村	人	村	人	村	人	村	人
山梨郡万力筋	石 和	1	1						
	清水					1	1		
栗原筋	石 和					1	2		
	田 安	2	2			5	5		
中郡筋	石 領	4	4			2	2		
	田 安	1	1			1	3		
八代郡大石和筋	石 和	2	2			3	4		
	石 和					3	4		
小石和郡	石 市	1	1			1	1		
中郡筋	石 市	1	1			2	2		
西郡筋	石 市	1	1			2	2		
巨摩郡中郡筋	石 和	2	2			2	2		
	石 市					1	1		
北山筋	石 市					1	2		
逸見筋	甲 府								
	甲 府	1	1						
武河筋	甲 府			1	1			1	1
都留郡 (南)	谷村出	1	1						
合 計		17	17	1	1	25	31	1	1

天保甲州郡内騒動の諸断面 (藤村)

質・盗品関係が山梨郡万力・栗原筋のみである事は、郡内から国中に出て熊野堂村打毀前後迄はそんな余裕があったからだろうか。

処罰の総計は延数であるが栄誉刑では叱五人、急度叱八五人五〇町五六六村、自由刑では過料錢三貫文四〇人五〇町五四一村、同五貫文四五人七村、村特定集団宛過料錢五人五〇町五四七村、三〇日押込二人、一〇〇日押込一人、三〇日手鎖二九人、不明日手鎖三人、五〇日手鎖一五人、三〇日逼塞二人、所払二四人、江戸拾里四方追放一人、中追放九人、入墨中追放一人、入墨重追放一人、遠島四二人、身体刑では敲四六人、入墨敲八二人、重敲三人、入墨重敲一人、生命刑では死罪一〇人、磔四人で、雑関係としては質関係七人、盗品関係四人、合計五八九人、一五〇町、一六六一村である。その内訳は甲斐国延数四五三人一八一村、信濃国一人、無宿一

一五人である。

この数字と中大本末尾の集計とを比較すると、礫四人は合致する。打首一〇人は死罪と合致し、遠島は中大本三八人に對し四二人である。入墨重追放二人は一人、入墨中追放一人と中追放九人は合致し、輕追放一人は江戸拾里四方追放一人であろうか。所払二四人は合致する。入墨追放九九人は放と敲との字の使用關係からすると入墨敲、入墨重敲八三人がこれに當るか問題である。敲四六人は中大本に當該項が見當らない。重放三人は重敲三人であり、武人は逼塞二人だろう。押込三人は合致する。盜物代償或ハ御取上等之者拾余人は質・盜品關係一人だろう。手鎖六七人は合致するが、その但四枚五十四は見當がつかない。不明日手鎖は請書が欠けており日數不明であるが、内容からは三〇日手鎖である。従つて三〇日手鎖は五二人となり五四と近い数字にはなるが、四枚は推測がとれない。御叱一万〇九九〇人余が叱・急度叱一三九人五〇町五六六村と仮定すると、五〇町五六六村が一万〇八五〇人余に當る。過料錢八〇五貫四〇〇文は一四三人一〇〇町一〇九五村が相當する。

以上によつて私の集計は粗雑なものであるが、大筋では許容されると考える。

さて過料錢であるが、惣額は中大本、東大本が合致している。内訳で村數、人數が判然としている額は六二四一貫四〇〇文であり、残りは村宛で過料錢三貫文を名主五六九村、長百姓一五村、過料錢五貫文を名主一五村である。請書からすると一村一名主とは限らないが、その計算では一七八二貫文で、殘高一八一三貫文から指引くと三一貫文になり長百姓分には不足する。ではこの惣額は誤りだろうか。或る村では名主、長百姓過料錢が村宛と個人宛と別条に出て来る事がある。これは合算されるかどうか、法制史の智識が乏しいのでよくわからない。重複を地域別に示したのが第六表で左の村に對して右の人が対応している。若し重複を指引いて計算すると名主分一七二六貫文になる。残りは八七貫文になるが、三貫文で割ると二九人分になる。長百姓は一村數人が通例だから少し一五村には苦しいが似

第7表 処罰者死亡等表

刑罰	急度叱	30日手鎖	?日手鎖	50日手鎖	所払	中追放	入墨中追放	入墨重追放	遠島	敵	入墨敵	重敵	入墨重敵	死罪	磔	合計
甲斐国百姓	病死 牢死 欠落 他大病 合計	1 1			1 2 1 1 2 3	2 2 4		1 1	25 25	1 2 6 9	5			3 3	2 2	5 40 8 1 1 55
無宿	病死 牢死 欠落 合計	1 2 3	23 23				1 1		14 14	3 8 1 12	1 1 23	1 1	1 1	7 7	1 1	5 77 4 86
惣計	病死 牢死 欠落 他大病 合計	1 1 2 1 1 1	23 23		1 2 1 1 3	2 2 4	1 1	1 1	39 39	4 10 7 21	1 26 1 28	1 1	1 10	10 3	3	10 117 12 1 1 141

天保甲州郡内騒動の諸断面(藤村)

た数字にはなる。現在の処はこれ以上の推理は行わない事にする。

さて駒飼宿外四八〇村に惣百姓一同不埒につき過料錢四八八三貫三〇〇文が課せられているが、その内の巨摩郡中郡筋平岡村の仰渡請書には「惣百姓共江村高に応し前書之通高百石ニ付式貫文過料錢被仰付」とある。この外の各郡にわたる五例を計算すると、百石に付き一貫九六九文から二貫文になるから、平岡村の例が標準である。

つぎに一〇三カ条に「存命ニ候得は」と本文にみられるもの、人名の脇に欠落等を朱書している場合がある事は前述したが、これは各写本で必ずしも統一していない。整理したものが第七表である。中大本の牢死一二人に對して一一七人になる。これに病死欠落を加えると、処罰者のうち榮譽刑、自由刑の過料錢、質・盗品關係を除いた者の百姓は一

第8表 百姓分処罰死亡等身分別表

	奉公人	百姓倅	百姓	百姓代	長者姓
病死	1	6	4	1	1
死落	1	1	33		
出病計			6		
			1		
			1		
病年欠他大合	1	7	45	1	1

三%、無宿は七五%に相当している。遠島、死罪、磔の者は殆んど牢死している事が知られる。百姓について身分別に示したものが第八表である。殆んど百姓であり村役人は二人に過ぎない。

第九表は処罰百姓について支配別に示したもので、谷村出張は便宜上石和分に含くめた。表を考察するのに天保期の各支配高、村数が不明のため制約がある。延人数では石和代官所が最も多いが、谷村出張分を除くと延人数では甲府代官所、延村数では市川代官所が最大になる。ここで相給の問題がある。過料錢惣百姓宛の場合に、他の条は問題ないが前述駒飼宿他四八〇村は計算すると二四万四一六五石相当であるが、請書中で問題のある三カ村を除く高合計は二五万四七六九石九斗五升七合四夕で、これに三カ村高を加えると一万一〇〇〇石以上の過剰になる。これは相給地がある事を示している。既に過料錢村数は相給毎に数えているから相当の相給地だろう。この処罰百姓を人、村について支配別に示したのが第三図である。本図は上記の制約があるので支配の入組が実際にはもっと複雑な筈である。この図に示された地域と一揆の行動範囲や進路について考えてい。これについて私のみた史料は次の通りである。

(一)「甲斐一揆騒動実録」は天保一〇年菊佐述とある。末尾には天保十一年として、持主は甲府三日町保坂多助と記している。菊佐翁は恐らく神主である。

(二)「甲斐国天保騒動見聞録」は、末尾に上田井村歌田隼人正常蔵書とあり、明治初年の書入れがある。巨摩郡武河筋上田井村で成立したかは断定出来ない。

(三)「甲陽郡揆天保録」は全一五巻であるが、私のみたのは巻一、八で、二種の写本であり、天保七年の成立である。

天保甲州郡内騒動の諸断面(藤村)

表別配支分姓百者罰処表第9

刑罰		合計																				
支配地域	叱	急度叱	過3ノ料錢文	過5ノ料錢文	過料錢	30日押込	100日押込	30日手鎖	50日手鎖	30日留塞	所私	近四方追放	中追放	入墨重遣放	遠島	入墨	重罪	死罪	疎	質関係	盜品関係	人
勤番 山梨郡 八代郡 甲府	人	村	人	人	村	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人
	筋	3	筋	3	筋	3	筋	筋	筋	筋	筋	筋	筋	筋	筋	筋	筋	筋	筋	筋	筋	筋
	原方小石和筋	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	計	16	50	1	50	55				1												21
石和 山梨郡	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋
	栗原方中筋	8	9	4	9								5		1	1	1	2				30
	原方中筋	10	10	2	10										2	1	3			1		5
	計	2	9	4	9																	7
八代郡 小石和筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋
	大石和筋	1	6	2	23										2	1	2					7
	小石和筋	3	23	2	24										1	1	2	1				14
	計	10	28	1	27										5	3	2					8
巨摩郡 留都筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋
	中筋	8	28	1	27										1	1	2					61
	留都筋	46	14	1	14										1	1	1	1				74
	計	25	153	10	120										10	8	10					199
石和 山梨郡 甲府	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋
	山梨郡	2	14	4	14										2	1	1					7
	甲府	3	22	3	22										2	1	1					13
	計	4	36	7	36										2	1	1					20
山梨郡 万山郡	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋
	万山郡	15	17	2	15										1		3					9
	山梨郡	6	17	6	6												4					4
	計	1	6	6	6																	1
巨摩郡 西北見河	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋
	巨摩郡	24	2	29	3										1	3	3					12
	西北見河	8	2	9	34										1	7	8					14
	計	4	64	11	79										8		20					223
甲府 巨摩郡 西北見山	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋	人	筋
	巨摩郡	1	12	12	3										1	4	15					1
	西北見山	3	6	3	6										4	15	20					9
	計	2	6	6	6										1							2





名主	1	6	5	24																
八代郡 大石和筋																				
惣百姓	1	1																	1	3
長百姓			1																2	1
名郷主	4	44																	1	
宿姓	1		2	44																
小石和筋	3																		2	4
惣百姓																				
長百姓	1																			
名郷主	1																			
宿姓	4	45																		
中郡筋																				
惣百姓	4																		1	1
定百姓	1																			
惣百姓																				
長百姓	18	15																		
名郷主			5	15																
西郡筋																				
惣百姓	1																			
厄介姓																			1	1
惣百姓																				
長百姓	2	7																		
名郷主			1	7																
惣百姓																				
東河内領																				
惣百姓																			1	





[illegible]

第1表 甲斐国百姓分処罰者身分支配別表

刑罰	叱	急度叱	過3	過5	過	30日押込	100日押込	30日手鎖	50日手鎖	30日遏塞	所払	江四戸拾里放	中追放	入墨量放	遠鳥	入墨	重	死罪	碓	質関係	盗品関係
勤番 (村)	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人
惣長名修		5	5		5					1											
持人主驗																					
家惣上名奉	16	2	1	1																	
町公		50	50		50																
持人組主人		1																			
石和	13	4			81								5		5	8	9		1		
百惣長名卿奉		16	4																		
姓姓姓主人		79	5																		
姓姓姓主人	2	1										1									
姓姓姓主人																					
石和(出張)	10	7			31			2	14		13	1	3		3		1		1	1	1
百店惣組名僧奉		33			27																
百店惣組名僧奉		41			41																
姓姓姓主人		1									1		1		2						
石和	4				36										2	1	1				
百惣長名		4																			
百惣長名		36																			
姓姓姓主人		1																			
姓姓姓主人																					
姓姓姓主人	4							3							4	13	20	1		1	1
府百医																1					

[illegible]

第12表 甲斐国百姓分処罰者身分表

身分	急度叱	過3料ノ錢文	過5料ノ錢文	過料錢	30日押込	100日押込	30日手鎖	50日手鎖	30日通塞	所私	江戸拾里四方追放	中追放	入墨追放	遠島	入墨	重罪	死罪	質關	盜品關	合計								
百姓 持弟子 姓代寄 百町姓・年 惣惣百租 長上名定 養僧 仲修浪 郷	人36 16	人17 2	村34	人1 1	村1	人31 27	村547 50	人1	人7 14	人14	人1	人8	人1 1	人24 2	人30 52	人1 1	人3	人2	人6	人3	人250 47 1 1 1 1							
村	54	85	616	40	591	45	7	58	597	2	1	8	14	2	24	1	9	1	27	32	53	1	3	2	7	4	473	1,811

一本には「甲州八代郡下野原郷鈴木屋筆立写之」、一本には「天保十三年寅十二月吉日唐柏村山田氏写之」とあり、両者共に八代郡小石和筋で写されている。

(四)「郡内騒動」(小野武夫編「徳川時代百姓一揆叢談」下巻)は、原写本の表題が果して表記の通りであったかは不明である。成立地は内容からすれば八代、巨摩郡の中郡筋である。

(五)「(天保郡内騒動書留覚)<sup>(79)</sup>」は山梨郡栗原筋下井尻村依田家が自己の見聞を中心にとまとめたものである。この他にも騒動見聞記はあるが、精しくはみていない。<sup>(80)</sup>

これらに出て来る村名を五万分の一の地図でたどると、各写本とも地域が異なる場合がある。またその進路も相異し、極端な場合には逆の事すらある。そして中郡筋では小集団が何組も前後左右に位置しながら、進んでは連絡をとって集合し、さらに前集団群を追尾して何回にもわたって小集団が進んでいるように推測される。その集団には場合によって頭取の名を書いたり、村としての名前を書いた旗が建ち、それに焚出人の旗も混在している時もあるらしい。従って騒動の比重が甲斐国西部に移っても、東部ではまだ緊張が続いている筈である。これら写本は進路を順を追って書いている体裁をとっているが、地図の上で追ってみると脈をなしていない場合が多い。これは若し推測が正しければ、上記の事情のためで、筆者は自己と知人の体験に、仰渡請証文を加えて書いたからではないか。

なおこれら写本には武田氏に対する甲州人の感情と、社会不安から来る一種の期待を混在している場合がみられる。筆者が作文したか、実際に風噂があったかは不明である。

私は第三図の鵜沢以南の巨摩郡を除いた部分を一応騒動の波及した地域と考えたい。たとえ打毀はなくとも、一揆の集団が進めば、その道路につながる周辺村落は、たとえ山奥の部落であっても呼応、又は反応を示めしたと思われるからである。そしてこの地域以外にも社会不安があった。それは、石和が常に甲州街道以外の道から郡内勢が来る

との風聞におびやかされ、市川代官所手代は東西河内領での騒動を予想して警備体制に入っていたからである。

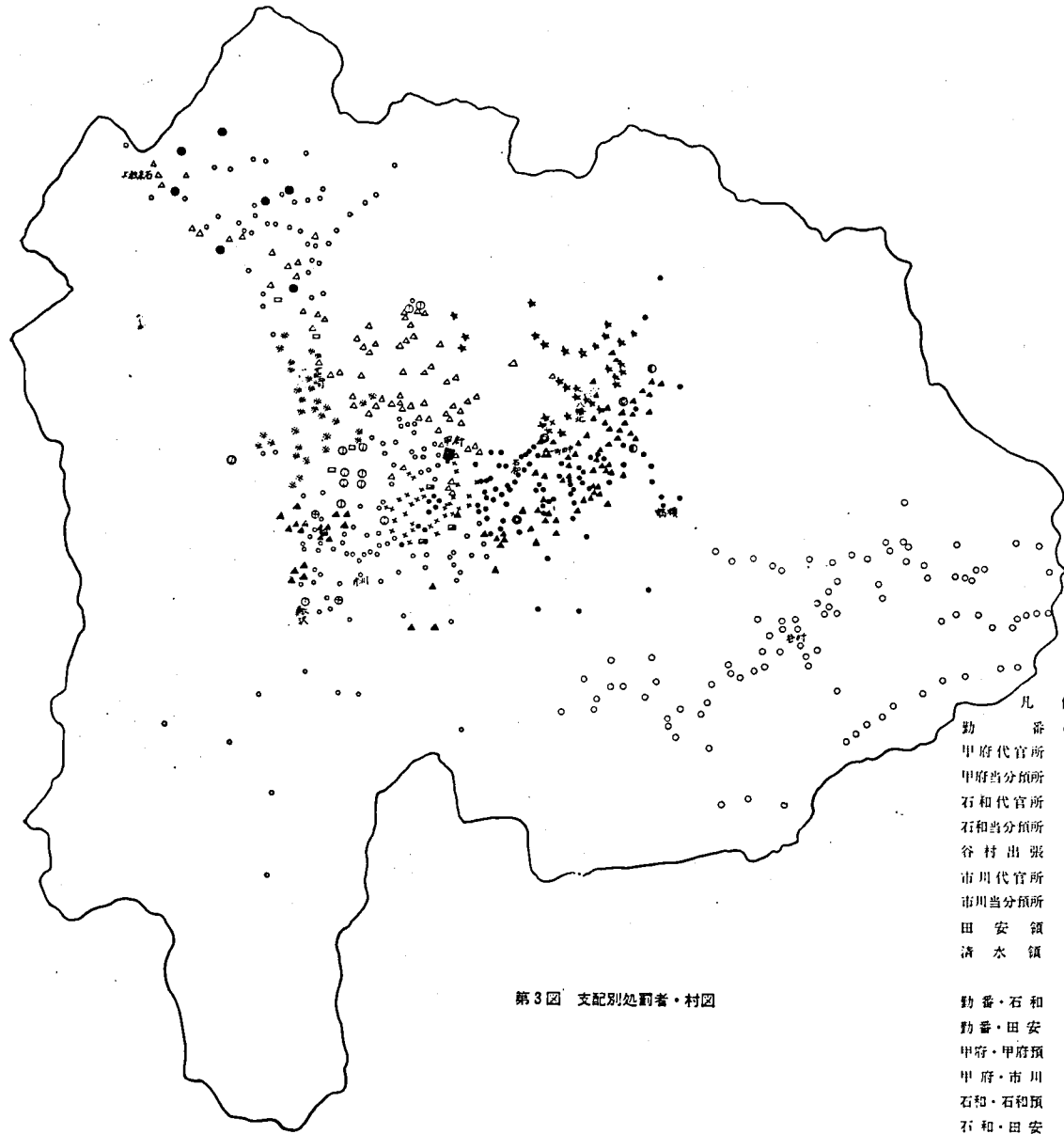
つぎに甲斐国百姓家持分について刑罰と身分の関係を地域別に示したものが第一〇表、これを支配別に示した第一一表、身分のみの集計が第一二表である。項目については、百姓の項には子・孫なども加え、名主には本宿などを含めた。他の項についても同様である。この他、都留郡の場合に百姓と組頭・年寄の項は、請書にこの郡の分が欠けているので、「信斎叢書」などにより補ったがなお充分でない。百姓の項の一部は組頭・年寄の項に移行する可能性がある。自由刑のうち押込は士庶共に、手鎖は庶民に、逼塞は士分僧侶に科せられる。<sup>(81)</sup>第一二表によると長百姓名主に手鎖は見当らない。身体刑、生命刑も同様である。全般的には長百姓は急度叱、名主は過料錢三貫文、惣百姓は過料錢村高に應じて百石に付二貫文が村としての標準的な刑罰である。これを越える、長百姓は過料錢三貫文、名主は同五

第13表 処罰分村地域別表

郡	領	全 村 数	処 罰	個人 百姓 処罰	非 処 罰	非 処 罰 村	%
山梨 八代 巨摩 都留 甲府 合	梨 代 摩 留 府 計	村55	49	1	6	10.9	
		原力	50	47	3	6.0	
		栗万	26	25	1	3.8	
		中北	21	20	1	4.8	
		大石	46	45	1	2.2	
		小石	41	41			
		中郡	30	20	1	10	33.3
		西河	8	7	1	12.5	
		東河	59	4		55	94.9
		不内	1	1	1		
		中郡	56	54	3	2	3.6
		西北	73	65	2	8	11.0
		北山	57	51		6	10.5
		逸見	73	67	8	6	8.2
		武河	41	31	2	10	24.4
		西河	63	4	4	59	93.7
		不内	2	2			
		(北)	61	35	6	26	42.6
		(南)	54	47	1	7	13.0
		51	51				
		868	666	31	202	23.3	

貫文の村は巨摩郡に多い。騒動の発端となった都留郡は、村としては標準的である。終幕の方に重点が置かれたのか、激しかったか、恐らく両方だろう。

ところで、これ迄は延人数、延村数による考察であるが、これを処罰村と非処罰村にわけて考えた。第一三表は地域別に示した村数である。処罰は村か、村と個人



第3図 支配別処罰者・村図

- 凡 例
- 勤 番 ●
  - 甲府代官所 ▲
  - 甲府当分預所 ※
  - 石和代官所 •
  - 石和当分預所 ×
  - 谷 村 出 張 ○
  - 市川代官所 ◦
  - 市川当分預所 ⊙
  - 田 安 領 ▲
  - 清 水 領 \*
- 
- 勤 番・石 和 ○
  - 勤 番・田 安 ●
  - 甲 府・甲府預 □
  - 甲 府・市 川 ◦
  - 石 和・石和預 ■
  - 石 和・田 安 ■
  - 市 川・田 安 ●



第14表 処罰分村支配別表

支配	処罰	個人百姓
勤番	56	
石和	87	6
石出	82	7
石和	36	
甲預	89	12
甲府	39	
甲市	137	6
市川	12	
市安	98	
田水	29	
清印	1	
朱合	666	31
計		

この場合には確認出来ない。

#### ハ、勤番・代官関係

勤番・代官関係は第一五表の通りである。勤番支配が一人であるのは、山手支配戸田下総守は「柳菅補任」巻之二十によると、「(天保) 八酉年二月八日於甲府卒」とあるからである。追手支配永見伊勢守は「慎徳院殿御実紀」巻一天保八年十月二日の条に「甲府勤番支配永見伊勢守その勤勞を慰して時服を賜ふ」とある。これは家慶の將軍宣下に際してであろうか。甲府勤番の同心の殆んどは処罰されている。つぎに代官手附のうち無構になっているのは甲府代官手附栗原太次郎であるが、史料によつては「御扶持召放」と記している場合がある。後考にまきたい。代官手附手代一人処罰、四人無構である。無構は巨摩郡での終幕に活躍したのが認められたからである。

田安清水領の役人については不明であるが、田安領代官所の構成員を依田家日記の年始の記事でみると、代官は天保一〇年飯野孫三郎、同一一年田口幾五郎である。また同七年前後の詰合手代の顔ぶれは多少の出入はあつても殆んど替らないから、処罰をうけていないのではあるまいか。若しこの推測が正しければ第一五表記載以外の代官所手附手代も処罰されていないだろう。

の場合、個人百姓処罰は名主長百姓惣百姓といったものに科せられず単に百姓のみの場合を示す。勿論相給の問題が解決していないから全村数は判明数である。一応の目安として考えると非処罰村は二三・三%で、東西河内領が九割以上非処罰であるから、同領を除いて考えると約一二%になる。八代郡中郡筋、巨摩郡武河筋、都留郡(北)がこの平均以上である。第一四表は支配別に示したものである。非処罰は

第15表 勤番・代官関係処罰表

身 分	御 役 御 免 逼 塞	御 扶 持 被 召 放	百 日 押 込	武 家 奉 公 御 構	御 役 御 免 小 普 請 入	御 役 御 免 小 普 請 入 逼 塞	御 料 地 方 奉 公 御 構	江 戸 払	無 構	合 計
勤番 支与 同家 来 代官 手 手 留番	1 人	4	42	2	1	2	6	1	1 3	1 4 42 2 3 5 10 3

手附手代については、石和代官所手附の一人は谷村から帰陣の途中、騒動の初期に都留郡黒野田宿で宿名主に探索を命じてごまかされ、同駒飼宿で頭取人と接触して申論したが失敗している。

各代官所は互に加勢に行ったり、引揚げたりで、甲府に一揆が侵入する迄は余り判然とした行動ではない。また勤番同心も甲府の南入口の遠光寺村に出役した者は、一揆がこないのので名主方で相談中に、一揆の方が通過している有様である。いずれにせよ此等の役人は動揺していたらしく、報告の封書の取扱などについてこの点を指摘されている。

なお一揆が石和に向いそうになった際に赴いた甲府代官所手代は、空筒にとどめる事を命ぜられ、ついで甲府入りを防ぐため酒折村に赴いた際も利害申論で、鉄砲は打たない事になっている。従って甲府代官所が玉込鉄砲使用に踏み切ったのは、勤番が城内から撃ち高島藩に人数差出を求めた頃からである。

ところで「甲斐国天保騒動見聞記」には、勤番支配戸田下総守、永見伊勢守について

騒動に戸田も障子も粉なミじん

御注進はやくしまうさがよい

永見して居てわあふない事たらみ

早くおはひなされ伊勢との

また田安領の一丁田中村陣屋について

一丁田二丁田続く騒動す

逃るハ安き右衛門の尉

という落首を記している。

この騒動と直接の關係があるわけではないが、前述の通り市川代官手代葉山孫三郎が川内領村々から駕籠訴されてゐる。天保九年清水三郎助「内糺御用留」には、石和代官所手代山下左内は「多く賄賂御取被成候故御しくじり」、また「三枝礼助浅井豊助儀取斗不宜義有之、下郷之者共出訴致し候ニ付、江戸表々兩人江御呼出」とみえ、彼等の不正調査をしている。恐らく天保八、九年には各代官所手代のうちの或る者は訴られているのではないだろうか。

## 七 誉 置

天保九戌年年江川役所「御用留」によると、同年六月に「甲州村々騒立候節寄特之取斗」として、川口駅富士浅間御師小河原主殿が「遠路之処早速当地迄訴出」、巨摩郡御嶽山御嶽権現神主内藤讃岐外一五人、小社家相原栄馬外八人が甲府代官所に家来をつれて警備に加はり、手附取鎮出役の際に附添い馳向った事、八代郡上野村御崎明神神主内膳父市川又六が市川大門村代官所に石火矢を携えた村人を連れて警備にゆき、代官から帰村を命ぜられ、夜に徒党市川大門村に乱入と聞いて自分屋敷前を固めた事について、各々誉置れている。

## 八 山梨郡下井尻村依田家の場合

依田家の天保七年「歳中諸日記」八月の条には

廿一日

一夜ニ入新役相談会合、村中名主前江打寄由、夜中色々相談有之候処調兼、廿二日五つ比朝飯給ニ歸ル、又々寄合ニ可相成候処、騒動ニ而打潰申候、散々ニ相成由

廿一日夜

一郡内々騒動来ル、駒飼鶴瀬一宿打通、夫々勝沼鍵やニ泊り、たき出しニ而田中へ移ル節夜明比之由、夫々熊野堂奥右衛門方へ行、夫々江曾原太右衛門方へ行、夫々井尻江移ル、周兵衛宅外助宅手前方へ少々入込早速引払

八月廿二日 天氣吉

一八幡々当所江騒動相移ル、周兵衛宅外助方依田帯刀方へ来り、少々打破早速引払  
右ニ付取持三人別帳記之

下男三人

村中上割人々

廿三日

一田中御役所江御届ケニ罷越、郷宿迄行、宿々届候趣申ニ付、早速歸ル、夜ニ入歸ル

依田良造

名主 清兵衛

厨兵衛代

申を助

村々一人宛泊り陣や詰ニ付泊り居候

一北筋を騒動来ル由ニ付、名主を触有之

村中高札場ニ詰居也

とある。当時依田帶刀は五六歳で隠居し、依田良造は二六歳である。浪人である隠居には、屋敷内の一劃が隠居分として宛てられている。

つぎに依田家文書の「(天保郡内騒動書留覚)」によると、八月二二日に熊野堂村打毀しのあと、下井尻村の隣村である小原村に至って打毀し、ついで清水家陣屋のある八幡北村から江曾原村に至り打毀し、引返して八幡橋を渡って再び下井尻村の隣村である七日市場村に来ている。前述の通り熊野堂村打毀は二二日であるから、日記の日付は多少混乱している。七日市場村から以後を長文であるが引用する。なお下井尻村周兵衛は依田家の宝暦期出の分家であり、両家の位置は青梅街道をはさんで北が本家、南が周兵衛である。

七日市ハ村江掛り、立石名所ニ而寝杯致、井尻村周兵衛、西広門田村周兵衛右両家相潰候由を申由承ル、右立石  
□□一手先上井尻村伝右衛門方江わか□□□□一手同村辻江掛り、下井尻村周兵衛□□□□少々家作打かふす也、  
夫々倅仰助宅江行、商屋江付家作少々打かふし、家内商物少々盗物又はあはれ取糺し候也、夫々高札場江掛り、  
一手上井尻村伝右衛門方江行、尤仰助案内ニ而幡持行大勢也

とあって、

然ル所、同村浪人依田帶刀方江は立不寄風節ニは候得共帶刀方家内目附を置、又は門前江たせうふせきのもを四

五人差置、たき出し持はこひのものの四五人附置、西は村境、又者たせう共仕、又は村中徳兵衛前、又は高札場鳥たき出しの幡立置、たその積手くはり致、又村内百姓方女房杯六七人取持として来り、又は下男式人たき出し、はこひたせう□、右之通失々手くはりいたし置し□□之比、騒動人大勢にて高札場々東ノ方江式□□依田帯刀宅前通行、石橋内たせう人控置□之もの、又はたき出し人杯、又は郡内料騒動人之内四五人、ふせきの者々被頼候ニ付相堅め、うしばしらの様成者を持ふせき呉候由、然ル所漸々納りニも可相成処、相不知人鉢のものの凡式拾人斗堅をぬけ入来り、広庭江入居由、右乱入のもの々外ニ六七人斗り裏江廻り、穀蔵見廻り又は家少々うちやぶり、帰りに門東戸垣打くじき杯致候、尤家内あはれ候節、一ノ宮村百姓之由にて勘兵衛と言者、悪頭共を追出し差押へ候ニ付、悪頭共引取候由、又は中萩原和原組嘉右衛門の由にて、当村浪人依田帯刀方の儀今日相済申候と、すゝり箱を借り、底江□□門口両□へ張付、萩原江帰り候由、□□并郡内料のもの四五人騒動人差押□□少々ニ而殊納り候歟、郡内料の者共又は近辺の者共不相分候由、一先のよせ手の節騒動人幡老本持先へ立、浪人なれば差かまひ無之と言東江通り候由、猶跡々式度大勢にて東江通候、四度目騒動人式拾人斗来ル節四五人にて家作やふり申し、門前々東へ行候、二度もの惣兵衛東々上井尻村伝右衛門方へ行由、高札場西々北江行候もの知助聞所にて伝右衛門方へ行由、入相比伝右衛門方相潰并ニ千蔵方引潰し

とある。八月二五日には、同村井尻家の天保七年「手帳」<sup>(84)</sup>によると、田安家陣屋の御勘定改役二人が、騒動改見分のために廻村をしている。再び「歳中諸日記」によると、九月七日の条に「市川御役所御手代江戸々被仰付ニ付、御手代村々国中御廻村有之由」とある。前述の葉山孫三郎<sup>(85)</sup>である。

つぎに天保七年依田寿鳳「日記覚てふ」によると、江戸御勘定御留役兩人が一〇月二五日から、十一月にかけて参加者、焚出人などの召捕、取調を行なっており、それを恐れて逃亡する者も出ており、村方預けや石和送りになる者

もでている。知人の場合には依田家では見舞に行っている。この間に天保七年「焚出一件諸事控」によると、一一月一日に田中陣屋（以下田安家陣屋をこう記す）から下井尻浪人依田帶刀、長百姓周兵衛に対して「徒党之者江酒食等振舞候」件について尋る旨の差紙が来ている。依田家の申開きは次の通りである。

御糺ニ付以書付奉申上候

山梨郡下井尻村浪人依田帶刀被 召出、國中騒立之もの共乱入之節、徒党之もの江酒食を振舞候義風聞有之始末、有躰可申上旨御糺ニ御座候、此段依田帶刀奉申上候、当八月廿二日夜騒立之ものとも大勢押寄候取沙汰ニ付、私義は先祖江拝領仕候御朱印類其外持伝候武器等取片付、騒立之もの致乱入候ハ、奉守護立退候心底ニ御座候所、他村親類并懇意之者詰居候故、昼食等用意いたし候處、騒立之もの共大勢押入喰事差出候様、押而申聞候間、無拗右用意之飯差出申候處、喰事致引払申候、尤別ニ騒立之もの江為給候迎焚出し候義は決而無之候、跡ニ而相改候處、米三俵程相見不申候義ニ御座候

右御糺ニ付、少も相違不申上候

山梨郡下井尻村

浪人

申十一月十一日

依田帶刀

田中

御役所

甚だ苦しい陳弁である。<sup>(86)</sup> 同月二三日石和の評定所留役から差紙が来ている。廻りの村々の二一人にも同様の差紙がきており、二六日に帶刀（民部）、良造（領藏）がいったが、帶刀は夕方帰宅し、良造は一二月朔日迄留められた。

天保甲州郡内騒動の諸断面（藤村）

良造は三〇日に始めて呼出されたが、昼後に明朝迄延期をつけられる。翌日は四時過に始まり、留役が「甲斐国浪人之儀は懸ル非常之節は、上之御助合をも可致身分なから、右様之儀何と心得て致した、御朱印を頂戴致して居るか致ぬか（中略）武田家比々郷土言ハ由緒を以て帯刀も御免有程之儀、尤石原伝五左衛門杯と言類も有か、余り身分柄かは心得ぬ」由を仰渡され、良造は「無言ニ而罷有」り、留役が「先よい一同承引致せ、追而沙汰ニ及」として終った。

天保九年五月六日には、相州久能村無宿吉五郎が、山崎で礫になり三日瀑され、<sup>(87)</sup>其他の病死した者は、石和川原に立札がたてられた。その前の壬四月二七日に永見伊勢守、井上十左衛門、西村貞太郎が任地を去り、同一五日に市川代官小林藤之助が着任している。関係者の石和陣屋呼出は五月一〇日田安領、一日清水領、一二日甲府町方である事が知られている。依田帯刀は同月一〇日田中陣屋から石和に廻ったが延期となり、翌一日市川代官出張小林藤之助から押込を申付けられ、同時に前記の浪人石原伝五左衛門も押込を申付けられた。田中陣屋を経て帰宅している。

同一三日依田帯刀代悴良造が田中陣屋に届ける際に、依田帯刀は「家内門メ出入無之筋」で慎中であるから、村方名主から出せといはれ、依田家では郷宿、親類、浪人仲間のいづれかを願い、結局「其儀無益之儀候、跡々之障リニ不相成」とされた。これは文化六年から浪人は年貢目録、宗門御証文を村方とは別に出しているからである。<sup>(88)</sup>

同年六月一二日田中陣屋に出張っている市川代官手代から、「此度押込江戸表々御免被成下候様御沙汰有之、右ニ付押込御免」を仰渡されている。

少し前に戻るが天保七年「騒動一件之節所々礼覚」には「丙申八月廿二日八ツ頃々夕方迄」として「しんせつ人」下井尻村神主加藤内蔵助、ふせき人は下井尻村二、七日市場村一、西後屋敷村上割一、合計四人であり、八幡村迄の焚出持運びとして下井尻村二人、「村内井門前高札場」迄の焚出持運びは下井尻村一〇、西後屋敷村上割四、合計一四人である。二二日の焚出握り人として下井尻村女三人、二三日には西後屋敷村中割一、岩手村一、合計二人、「時



第16表 依田家持高表

村名	寛政元	文政元	天保7	安政元	明治元
下井尻	石 136.6484	77.5081	113.3717	97.6316	110.7798
七日市	62.5910	58.1100	10.0480	6.5450	18.5440
上塩後	27.4927				
下塩於	(1.5068)				
西広門	(2.5480)				
八幡田	?				
下塩南		2.7246	?		?
上井尻		.4307			
西後屋敷			1.8322		
上割	余		余		余
合計	230.7869	138.7734	125.2519	104.1766	129.3238
下井尻	100	57	83	71	81
七日市	100	93	15	10	30
合計	100	60	54	45	56

々来ル」として下井尻村女五人が記るされている。彼等には勝尾ぶし巻連、金貳朱、のり引巻束、のり入巻束、足袋巻束が御礼として各々に贈られているが、そうでない者もある。以上の事からすれば、依田家は一揆と小原村当りから接触し、八幡村迄焚出し、二三日にも焚出している。

当時の依田家については、先ず天保七年持高は一二五石余である。同家持高の推移は第一六表の通りである。高に括弧を附したものは推定による事を示す。基準とした寛政元年二三〇石余の持高は、安永二年の二八五石余に比らべると五〇石余減少している。安永二年下井尻村持高は一三七石三斗六合七タ、七日市場村持高は七八石四斗六升であるから両村以外での変化が考えられる。さて天保七年には寛政元年に比較すると半減している。特に七日市場村では一割五分迄低下している。以後は明治迄一進一退である。下井尻村の場合でも四七年間に六割五分余に迄減少している。依田家文書に文化五年松本秀葉斎・坪井彦太郎（家相図）と天保一五年江都一源堂家相方位撰定記がある。私には当時の人の心の動きはわからないが、家相図はその家が家運の衰えを感じている時期に作製されるといわれている。

第17表 下井尻村持高構成表

持高	文化12	明治5	人別		高別	
			文化12	明治5	文化12	明治5
石	人		%		%	
0～	54	40	63.1	51.2	5.6	4.1
1～	16	25	18.9	32.1	8.9	14.6
5～	5	5	6.0	6.4	8.6	7.4
10～	5		6.0		13.7	
15～	2	3	2.4	3.8	7.9	12.3
20～		2		2.6		11.1
30～	1	2	1.2	2.6	11.3	20.0
50～	1		1.2		18.7	
100～	1	1	1.2	1.3	25.3	30.5

つぎに下井尻村の文化一三年二月「去亥年田畑高帳写」、明治六年一月「壬申御貢納勘定牒」による下井尻村持高構成は第一七表の通りである。両年共に高一石以下の者が八割余に及び、一〇石以下では九割に近い。文化一二年依田家持高は依田領蔵八〇石二斗一升八合八夕、依田帯刀（隠居）四七石八斗九升二合八夕、合計一二八石余であるが、表では合算しないままにした。分家周兵衛は一〇七石五斗三升一夕である。そして明治五年依田楯脇一二六石七斗五升四合七夕、分家周兵衛四七石九斗九升四合八夕である。従って幕末を通じて依田本分家は村では目立った存在である。本家持高が分家のそれより多いし、また分家持高が半減しているが、依田分家には史料が全く残存していないので、その性格を究明する事は困難である。しかし現在の依田家の口伝では、幕末には本家より分家が景気がよかったとしている。<sup>(90)</sup>

さて天保七年申正月依田良造「小作帳」によると、下井尻村分小作人は下井尻村二二、上井尻村西方一三、七日市場村六、合計四一人、七日市場村分小作人は七日市場村七、上井尻村西方六、合計一三人である。これら小作人は下井尻村では、米一八俵余から大六升迄、七日市場村では粃一二俵半から一俵余の小作をしている。そして不熟の年柄のため天保六年十一月「当未小作納方請印帳」には「小作入附御米大壺斗式升壹俵地ニ付米大式升宛」<sup>(91)</sup>引に、下井尻村一二、上井尻西方一一、七日市場村二、合計二五人の小作人が請印し、天保七年一〇月「当申小作引方請印帳」には米大四升五合宛引を下井尻村四、上井尻村西方九、合計一三人の小作人が請印している。さらに天保七年「歳中諸

日記「十一月一〇日の条に、下井尻村小作人八人が「夕方当村小作人共来ル、格別不作ニ付、先達而勘弁引之上へ、又々引異候様申来ル、本当年儀は一ヶ年惣方糶ニ而相納方無心申来ル」とあり、同一五日の条には依田領蔵、周兵衛同人俸知助が「上井尻西方へ小作引方請印取ニ行」とあり、本分家は地主組合的行動をとる。翌一六日には上井尻村西方の本・分家小作人が両家に対して、別段の不作を理由に「御年貢并夫錢之品而已ニ而御済被下、跡作徳之分小作下へ勘弁ニ預り度由申来り」、依田両家はこれに対して「昨日承知之趣ニ而、又々今日被参候義、右様以之外成事、夫共御年貢夫錢之所ニ而勘弁無之候而、小作納之儀不致哉、又は昨日談之処米四升五合引ニ而相納候哉、何レニ而も早束相談ニ而此座ニ而承り、右御年貢夫錢ニ而無之候而は不斗由候ハ、早速今日出訴可申段嚴敷申聞」せ、やっと承知させている事実を記している。この小作人層対地主間の緊張の存在は、天保期の不作を考えれば、前からあったろう。この種の緊張は近世後期の小作制度からすれば、左程異例の事ではないかもしれないが、現在の処まだ充分研究してはいない。<sup>(92)</sup> また引方請印の小作人が全員でない事の意味も、まだ研究が及ばない。

つぎに、天保六年乙未一〇月依田良造「米穀弘方帳」のうち、天保六年取入分米穀売弘方は上塩後村米三俵、下塩後村米二〇俵、上井尻村西方米二六俵、下石森村米九俵、歌田村米二七俵、大野村米二〇俵、八幡南村米四俵、下井尻村米七俵・大升米六升、徳和村米二俵、駒飼宿米二〇俵・糶三〇俵、不明（恐らく下井尻村）米一三俵であり、天保七年取入分は上塩後村米二俵、菱山村米一八俵・唐黍四俵、粟生野村米二俵、歌田村米一二俵、上岩下村米一〇俵、小原村米四三俵、上井尻村西方米六俵、西後屋敷村白米四升、甲府白米八升、下井尻村米六俵三升・白米一斗・赤豆大六升、不明米一五俵五升・唐黍二升、鶴瀬村赤小豆大九升となっている。<sup>(93)</sup> 天保七年の白米は飢饉の合力と思はれる。甲府を除いた全べては山梨郡の村々である。

最後に天保六年末正月依田良造「金子帳」の天保七年分については借金に記載があり、貸金はみられないようであ

る。

以上で天保期依田家についての概略を終る。先述の通り幕末の依田家について全般的な研究を進めておらず、単に天保七年に焦点を合はせたものに過ぎないから今後訂正して行きたい。

さて前述の手助人と小作人との関係であるが、手助人三人のうち小作人は七人で、うち二人は母子のため六軒である。下井尻村小作人二二軒のうち二割七分に当り、彼等の小作地は米八俵余から大五升・甲銀六匁まで、平均米五俵余である。そして前述の天保六・七年小作引方請印に際しては、天保六年が三人、同七年には一人が手助人である。また七年一月一〇日の下井尻村小作人八のうち一人は手助人である事実がある。

以上の事実からすると、騒動の情報が流れて来れば、社会的緊張度はたかまって来るから、一揆の具体的な動きを示す言葉とは言え、小作層にとっては「郡内々騒動来ル」という感じのみでは迎えていないだろう。そして当時の小作関係が既にかかる際に手助けに地主のもとに行かない関係になっているのか、それとも小作地の比重が依田家のそれよりも他の地主分小作地が多くてそちらに行ったのか、または義理と利害関係にはさまれて釘付け状態になったのかは、今の私には断定出来ない。それと同時に小作関係もない金融関係もない者がなぜ手助けに来るのか。これも問題である。そして地主对小作間の緊張状態がありながら、他村から一揆が来れば村中が高札場に集まる村意識がある<sup>(94)</sup>。これは下井尻村に限らない。都留郡の場合に鎮守の森に集合し、また組頭<sup>(95)</sup>、長百姓が小前に参加を勧め、巨摩郡の場合には村限りの参加、又は防衛を示している。八代郡の場合にも同様の動きがある。そして村の標準的な処罰が名主過料銭、長百姓急度叱、惣百姓過料銭である事は村として行動が行なはれた事を示しているから、村役人の動きは単に「制方不行届」のみでは律しきれない面を含んでいる。

しかし他方では一揆が打毀の対象とした穀屋、酒造、質屋は名主、長百姓の嘗んだ場合が多いし、<sup>(97)</sup>都留郡では「村

限役人共宅へ罷出し夫食手当の義申立騒立」ている場合がある。

つぎに無宿は山梨郡栗原筋大野村の場合、百姓三右衛門方に身分を隠して逗留している無宿重吉は、一揆が大野村に押寄せ防人足として三右衛門が出る際に留守をたのまれている事実がある。この事は適当な例ではないが、無宿が「村」の構成員でない事を示しているのではあるまいか。無宿の生活の実態が不明であり、無宿の存在を許容する社会構造も不明のため、これ以上はたち入らない。

ところで駒飼宿で手附に利害申論をうけた頭取人次左衛門が「猶予いたし候」様子をみた日影村の者が、頭取でも心弛みの者は打殺すと罵っているのは、小前が突上げていると共に、一揆としての集団の論理が働いている事を示している。

## 九 巨摩郡横手村浪人横手彦左衛門の場合

依田帶刀は三〇日押込申渡であるが、八代郡中郡筋関原村浪人石原伝五左衛門は、「切防も可致身分柄之処、心得違ニ而焚出等致し、殊ニ石原伝左衛門と言紙旗等相立飯林等所江持運ひ焚出」したので一〇〇日押込申渡になった。浪人で処罰されたのはこの二人丈だが、浪人について天保九年と推定される葉山孫三郎「甲斐国悪例仕癖申上候書付」は、「取株之浪人多く、右故去々申年郡内領々百姓騒立之節も、老人として門戸を閉其防方致候ものも無之、騒立後は村毎ニ而諸国浪人を留メ置、劔方或は鎧迄も相心得候積、我一ニと仕合杯いたし、自然耕作は打忘、ケ成相暮候もの之忤杯、浪人共と一同出府之上、長刀を帶歩行、兎角流行氣之国風」としている。勿論この史料は前記の川内領三六カ村裾籠訴に対する反論と思はれるから、その点を考慮する必要がある。また諸国浪人の性格は明らかでないが、天保一四年七月の触に、<sup>(99)</sup>「近年諸国在々、浪人體之もの多く徘徊いたし、頭分師匠杯与唱へ、廻り場留場と号、

銘々私ニ持場を定、百姓家江参り合力を乞、少分之合力錢等遣し候へハ悪口いたし、或は押而止宿を乞、又者病氣抑と申致逗留候内ニ者種々難題申懸、金錢ねたり取」り、無宿悪党と同様に召捕えの對象になっている者をさしているのではないだろうか。

巨摩郡武河筋横手村浪人横手彦左衛門は天保七年一〇月に甲府代官所え「甲州村々徒党及乱妨候節防方致手配候始末申上候書付」<sup>(10)</sup>を差出している。それによると、横手村は甲州道中の台原宿から二〇町南にある山懐辺鄙の村であるが、八月二三日に台原宿人足に出ていた者が暮六時に帰村し、騒動が石和辺に及んだ噂を伝えた。遠見の者二人が夜五半時に甲府、韭崎の状況をもたらした。巨摩郡村々では遠見の者を出したらしい。彼等のなかには途中一揆にまきこまれて参加し、処罰されている例が「甲騒落去」<sup>(10)</sup>にみえている。

横手村では七時に村役人惣百姓が名主宅に集まり「剛氣之者四拾人獵師七人猪鹿威鉄炮七挺」と村内にある先祖所持で今は老挺宛預けてある鉄砲二五挺に玉藥、兵員を用意し、人数五〇人の竹鑓を一〇人宛村役人に差添え、他の者は棒を持ち、明松、夫食を用意する。横手彦左衛門は「差働之者」一〇人と共に台原宿名主の処に行く。二四日昼八時に一揆が台原に押寄せ「私井召連候者及同宿役人孫右衛門一同徒党人差留」めたが乱入され、「何れ差押可申と手配」中に、徒党は横手、大坊新田、柳沢村に向ったので、彼も村に帰えたとしているが、この陳述は少し問題がある。「甲騒落去」<sup>(10)</sup>によると、台原宿名主は酒食用意、加勢人足馬駕籠を提供し、そのため処罰されているからである。恐らく彼にしても多少の働きはしても、転進したのが真相ではないだろうか。この際の差働之者が依田家の手助人と性格的にどうかは不明である。村に帰った彼は柳沢村浪人駒井甚蔵と連絡をとり、村では四手に布陣していたので、夜九時に一揆は「声立明松井紙幟等建多人数」で押寄せたが引返してた。二五日に村の固めは引払ったが、台原、白須村辺で早鐘のため六〇人を引連れ、次で逸見筋の中丸村辺で打毀というので横手村人足四〇余人・鉄砲一五挺、

大坊新田人足二〇人、柳沢村人足二八人を引連れて行ったら、大八田村に一揆が移動したので、そっちに行くとも甲府代官所手代が召捕えた所であった。これは彼一人丈けの行動でなく、騒動の終幕に村々から人足が動員されたなかでの動きだろう。其際に土地不案内の高島藩人数を甲府代官所手代に引合はせている。婦村の途中、一揆が西郡筋から武河筋に押寄せ、上田井村三吹村辺に來たとの噂で人足が夫食を用意して上田井村迄行ったが、何もなく婦村した。騒動が制圧されたと甲府代官が認めても情報が乱れ飛び、騒動が部分的に続行しており、全体の情勢がなお不安定である事を示している。

(103) この山村である横手村の動き方は、平地の巨摩郡西郡筋西条・荊沢村などでも似た動きが行なはれたと考えられる。これらの地域を支配する市川代官所は天保四巳年一〇月二一日に次ぎの触を出している。

当秋違作ニ付小作米金用捨之儀、小作人共申分通、地主共承知致ため堂宮等江大勢相集り押而申談候趣相聞、既ニ陣屋元ニ而も法外之働いたし候ニ付、頭取之者召捕入牢申付吟味中ニ候處、今以右類之儀不相止村々も有之趣相聞候、小作之儀は地主江相歎用捨可請事ニ候所、右会合所江不罷出ものは、つき合相省又はあたをなすへき杯申威、村中之もの寄集り、無幹ニ引方之儀申懸ケ候は、徒党ニ而御法度ニ相背不屈ニ付、村役人共々利害申聞候而も不相用、強而寄あつまるニおいてハ、召捕嚴敷令吟味条、早々注進可致候、此廻状小前末々之者迄不洩様為読聞、昼夜刻付を以相廻し、留村々可相返者也

(104) とある。同様の触は文化五年九月、文政八年一〇月にもでている。(105) 従って巨摩郡でも都留郡同様に問題がないわけではない。それと前記の動きや騒動えの小前層のそれぞれの条件下での参加は、騒動の流れとの関連で問題にすべきであるが、現在の処では不明である。

# 一〇 巨摩郡河原部村の場合

葦崎宿近在の河原部村では、被打毀人一四人、被盜取人三人がでている。郷宿での申上である天保七年八月「騒動御書上ケ控」<sup>(16)</sup>によると、被害は次ぎの通りである。

(一)百姓庄助の場合、家内男女一〇人の暮しで農間渡世として穀物太物小間物荒物商売をしている。夜七時頃一揆が押寄せて来たので、家内と共に立退いた。跡の家では戸障子、戸棚、小簞笥、箱類、罎釜、勝手道具が打壞され、木綿反物約一〇〇反、木綿切々布約二〇反、麻類約三〇反と売溜銭約五〇貫文のうち一〇貫文余が投出され分散し、簞笥、長持各二棹が毀され、衣類五〇品、帳面類も同様で、その他に諸道具、荒物、小間物類は表で焼捨てられ、他にも紛失している。穀物は見世先のものは往還に散乱、土蔵内の米穀約二〇俵は懸り目を切開いて踏荒してあった。

(二)百姓清助の場合、これは前述の庄助の親で、出見世に引越し農間渡世として古着太物類商をしている。家内が逃去ったあと、簞笥七棹、三尺戸二四本、六尺戸五本、障子二四本、戸棚一〇行、その他膳椀など道具類の大半が破壞され、古着約一〇〇品、布類約三〇〇反、切々太物類約二〇反、小倉約五〇本、麻布約一五〇反、絹類約一〇疋、絹切々約二〇丈と家族の衣類約五〇品の一部が盜まれ、残りは諸帳面と共に焼捨てられている。また銭約一五〇貫文のうち約一五貫文と、切散した雑穀類約五〇俵が踏荒されている。

(三)百姓松兵衛の場合、家内六人暮で農間渡世に穀商をしている。一揆が押寄せて家族と共に立退き、一揆が南下条方面に移動したあとで調らべた被害は、戸障子襖六四本、戸棚六行と膳椀瀬戸物類、勝手諸道具の全部は破壞されている。家屋の柱全部、鴨居敷居数カ所には斧刀広で切付けた跡があり、帳簞笥、銭箱は打碎かれて甲金一両、貳分金一両三分、銭一〇貫文が盜まれた。衣類約四〇品、夜着蒲団三と通諸帳面が焼捨てられ、見世先の雑穀麦米など約二〇



俵は俵口を開いて、台所から往来に散乱していた。

## 一一 結びにかえて

騒動の直後である天保七年八月二十九日に市川代官所は次ぎの触を出している。

此度の騒動、最初者米穀高直を發り候事之由ニ候処、追々心得違之もの又者遺恨有之もの差加り、及狼藉候様子ニ而米穀をも焼捨候次第ニ成行、不届至極事ニ有之、重き罪科ニ被行候事ニ候条、此段老人別ニ篇と申論、此上心得違不届之所業無之様情々可申渡候、此廻状村名下令請書、早々順違留り可相返もの也<sup>(107)</sup>つぎに、この騒動について徳川斉昭は天保九年八月朔日の封事で

然る処凶年にて百姓の飢死候をも見殺しにいたし、武備ハ手薄く候て士民情弱に相成居候故、近年參州甲州の百姓一揆徒党を結び、又ハ大坂の奸賊容易ならざる企仕、猶当年も佐渡の一揆御座候ハ、畢竟下々にて上を怨み候と、上を恐れざるより起り申候、島原騒動の後二百年程、弓鉄砲等相用候儀無座候処、近頃ハやゝもすれバ弓砲を用ひ候様罷成候儀、御役人共一ト通りに心得候而ハ不相濟事に御座候<sup>(108)</sup>としてゐる。そして下井尻村の浪人井尻家は、天保八年「手帳」に

### ○改革<sup>カクハツ</sup> ○天下革命

千年ニ老度位アリ由

と記るしている。八年は取調も一段落している時期であるから、この記事を騒動に結びつける事には問題があるかもしれない。しかし私には井尻家でのうけとり方を示しているように思はれる。

騒動が甲斐国一円に及んだ事は、甲斐、武蔵、相模、伊豆、駿河の国々の社会情勢と共に、幕領の支配が代官手代を勤

めた内藤光備が安政三年序「俵ふるひ」で「嘗へバ反逆人一揆徒党ノ者アリテ、其支配所ノウチ、不時ニ千万人蜂起騒動スル事アルトキハ、近隣最寄ノ大小名へ御代官ノ印書一封ヲ飛バスレバ、即時ニ召捕ノ人ン数ヲ差向ケラル、ノ手配アリ」とするものだった事にもよるのだろう。本稿のとりあげた甲州郡内騒動の場合には、周辺の大名は境を固めて波及するのを防いでいる。しかし貝塚茂樹氏が秦末の陳勝呉広の乱について述べ、ついで「地方的な農民蜂起が、たやすく全国的規模をもち、政府打倒にむすびつくこと、この二つはこれ以後の中国農民運動の特徴である。

(中略)この点は、日本の農民運動とはまったく性質がちがっている」と指摘した、社会構造が問題である点が注目されるが、まだ研究が及ばず、中国社会についても智識が乏しいので、単に註記するにとどめるものである。

註

(1) 天保七年下花咲村「御請書小前連印帳」(中央大学歴史学会編「甲斐国郡留郡内一揆関係資料」三一頁)。なお本史料は手塚寿男氏の御好意により借覧した。記して感謝したい。

(2) 「甲斐国郡留郡内一揆関係資料」三八～九頁

(3) 青木虹二氏の研究によると、近世の百姓一揆は天保期が最大のピークで、天保七年はその後期における第二のピークとされている。「(百姓一揆の年次的研究)」なお天保時代の百姓一揆については黒正巖「百姓一揆の研究 統篇」

一三七～四八頁、遠山茂樹「明治維新」二七八頁参照

(4) 手塚寿男「天保騒動の郡内局面」(「騒動の基盤」)「同(1)騒動の構造」甲斐史学一六、一八・一九合併号

(5) 有泉貞夫「幕末・維新时期における甲州農村の政治的動向」

甲斐六、七号によると「それは甲州における最初の『世直し一揆』であった。明治初年の世直し一揆に現われる、土地革命への方向をもった高度な政治的要求は、未だ姿を見せていないが、『諸帳面諸証文の類迄焼捨』てる一揆の行動そして『日雇かせぎ』の無宿半プロレタリアートが広汎に参加した事は、分解の進行による農民層内部の矛盾が非常に激化していた事を示すものであった」(同氏が抜刷を製本されたものでは三頁)とされている。本論文は有泉氏の御好意により借覧した。記して感謝したい。

(6) 従来の業績としては手塚、有泉両論文の他には竹川義徳「山梨農民騒動姓(天保騒動)」甲斐史学一五号、野沢昌康「山梨県の農民運動史」甲斐史学二二三頁、増田広美「犬目村の兵助について」郡内騒動の中心人物」甲斐史学六号、上野晴朗「天保騒動」(山梨の百年九一六頁)

青木虹二「百姓一揆の年次的研究」一二九～三一頁、「東山梨郡誌」二七三～九頁、「北都留郡誌」一一四九～六三頁、「中巨摩郡誌」通史一六～二〇頁、「北巨摩郡誌」三一～七頁、「日下部町誌」一三五～六頁、「八幡南村」七三～四頁、「豊村」九三～五頁、「櫛形町誌」三八八～九頁などである。

(7) 「甲斐志料集成」四卷二六～三二、九六～三三頁

(8) 「山梨県史」一卷三三～四頁

(9) 「東山梨郡誌」二六六頁、上野晴朗「甲州風土記」二五一頁

(10) 上野晴朗「甲州風土記」二五八頁、「櫛形町誌」二六三～四頁

(11) 「甲斐国都留郡内一揆関係資料」三四頁、なお天保九年山口鉄五郎元手代葉山孫三郎「去々申年八月々翌酉年十一月迄私儀市川陣屋詰中取斗候荒増申上置候書取」（伊豆韮山代官江川家文書―韮山江川文庫蔵―以下江川家文書と略記する）には市川代官所を高五万石としている。また明治三年の田安領知は四万七九六〇石九斗一升四合四勺五毛である（「山梨県史」一卷五頁）。

(12) 平松義郎「近世刑事訴訟法の研究」

(13) 平松「前掲書」四三六頁

(14) 平松「同右」四九五～六頁

(15) 平松「同右」五〇〇頁

天保甲州郡内騒動の諸断面（藤村）

(16) 平松「同右」五〇八～九頁

(17) 「柳營補任」（大日本近世史料五卷一〇四頁）

(18) 甲府勤番については「有徳院御実紀」巻十九享保九年七月四日条（徳川実紀第八篇）新訂増補国史大系四五巻三四一頁、「古事類苑官位部三一三六三～八頁」「甲府略志」一一七～三〇頁、村上直「甲府勤番支配の成立」（甲斐史学特集号「甲斐地方史の諸問題」一二九～三九頁）齊藤典男「成立期甲府勤番士の知行高について」甲斐史学二二号四八～六八頁参照、なお明治元年の甲府城勤番の職制は幕府の旧制によっているが、これについては「山梨県史」第一巻二五四頁参照

(19) 平松「前掲書」四三七頁、安藤博編「復刻徳川幕府県治要略」三二頁参照

(20) 平松「前掲書」四六一頁

(21) 平松「同右」八四四頁

(22) 史料館所蔵依田家文書（史料館所蔵史料目録）五・一三集所収）

(23) 鈴木寿「天領の役人構成」史学雑誌七六編四号五四～五五頁、なお鈴木氏から平林本写を借覧した。記して感謝したい。天領の支配構造については鈴木寿「天領の研究について」文部省史料館報六号三～四頁参照、なお天保九戊七月清水三郎「内札御用留」（江川家文書）には「谷村詰御支配様六人ニ而、元々加判公事方三人相除、残三人出役之衆

天保甲州郡内騒動の諸断面（藤村）

ニ候得共、元ノ之外五人共最奇相わけ東西入替り廻村被致」とある。

(24) 「日本財政経済史料」四卷三八頁

(25) 平松「前掲書」一八一頁

(26) 平松「同右」一八二頁

(27) 平松「同右」一八三頁

(28) 平松「同右」一八五頁

(29) 平松「同右」一八四頁

(30) 平松「同右」一八五頁

(31) 「東山梨郡誌」二六〇―四頁参照

(32) 無宿については石井良助「日本法制史概説」五〇―一二頁、「江戸の刑罰」（中公新書）一八二―九九頁、三浦周

行「国史上の社会問題」（日本文化名著選）一八三―六頁

(33) 山梨県立図書館蔵、本史料の原表紙には「召捕者取斗方

并甲斐国御取締元済伺留 喜多村蔵」と記るされている。

(34) この史料は「嘉永五年八月」とあるが、勘定奉行、代

官名からすれば天保の写違いである。

(35) 甲州の博奕については「山梨県史」一卷一五五六頁参

照、なお子母沢寛「続ふところ手帖」一三九―四九頁には

黒駒の勝蔵についての調査がある。これに類するものに子

母沢寛編今川徳三「甲州俠客伝」がある。農村における博

奕については近世のものではないが、きだ・みのる「気違

い部落周遊紀行」（新潮文庫）八一―四頁参照。

二七四

なお御坂町の二の宮町の岩間家の日記には「安政年中ニ相成り、竹居村安五郎、若宮ノ勝蔵、国分村ノ三蔵、上府中ノ勇転、市川ノ市松など親方分ニテ博奕打道業者発行致候事法外ニテ右ノ者共子分引連喧嘩致候事度々なり、鎧を着シ鉄砲鎧打刀ハ勿論ナリ、何ノ喧嘩致候も軍ノ如ナリ人殺シ年中ヲ以法外ナリ此頃ハ右ノ者共発行致シ増長致シ候ニ付農業ニモ女斗リニテは野中ハまかり出かたきナリ、此ごとく増長致候得共、役所も石和市川甲府長禪寺前一町田中ニハ田安殿ノ役所も四ヶ所もあり、殊ニ甲府御勤番追手ノ御屋敷ニ詰合山ノ手ニモ同様ノ詰合其外御蔵番衆五百軒も有之候得共右ノ者共増長致候をも禁候事も不行届ニ候、併シナガラ世ノ乱ルル時ニ至り候哉上之御威光モ薄く相成ルナリ」（上野晴朗「甲州風土記」三三三―四頁）とあるそうである。

(36) 江川家文書

(37) 平松「前掲書」五三〇頁

(38) 平松「同右」五三一頁

(39) この点については鈴木寿氏の御教示による点が多い。記して感謝したい。なお佐藤進一「守護制度史上の信濃」信濃二〇巻一〇号には「京都に対して、関東に本拠をおく幕府を守るには、関東の外壁をなすところの国々、北の方から言えば、越後・甲斐・信濃・伊豆・駿河といった国々はどうしても確保しなければならない。こういう政治的な要

請があつたはずであります。(中略) こういうような観点をもう少し広げてみますと、例えば、政治的な重要性は駿河や信州よりは劣るかもしれませんが、奥州の磐城、岩代地方がこれにあたる」(八〜九頁)とゆう指摘がある。近世の政治は勿論中世のそれと同一ではないが、関東の政治的位置を考えれば、御取締出役と上記の地域との関連を考慮する必要がある。

(40) 甲府市坂田家文書

(41) 竹川義徳「山梨農民騒動史(一)天保騒動」甲斐史学一五号に一部が紹介されている。

(42) 矢野太郎編「国史叢書三」九二〜一二〇頁

(43) 「甲斐叢書」二卷五二八〜三二頁

(44) 石和代官西村貞太郎は八月三日の申渡のなかで、「自分儀亡父忌明去ル十九日出勤不取敢昨二四日出立相趣事ニ候」(「甲斐国都留郡内一揆関係資料」四九頁)とある。

(45) 荒井頸道編滝川政次郎校訂「牧民金鑑」下巻には、天保四年一月二日に「在々ニおゐて盜賊悪党もの有之節、押捕候様村役より穢多非人江申付置候上者、無宿もの押捕候共、早速村役人申立可任差函儀ニ而(下略)」(一七四〜五頁)とある。恐らく非人が騒動などに際して召捕に加わる事は違例の事ではないのではあるまいか。

(46) 「豊村」別編史料(一九七)一八一頁、原本は山梨県立図書館蔵、村上直「甲斐国と塩」日本歴史二〇九号七五頁、天保甲州郡内騒動の諸断面(藤村)

同「二人の市川代官について」甲斐史学九号六〇頁はこの史料によっている。

(47) 江川家文書

(48) 騒動の直接及ばなかった地域でも、その条件は同じであるとすれば、騒動が終っても条件は残っているから動きはとまらない。「去々申年八月々翌酉年十一月迄私儀市川陣屋詰中取斗候廉々荒増申上置候書取」によると、天保七年か八年か不明であるが、川内領の動きを伝えている。未紹介の一揆と思はれるので長文であるが引用しておく。「川内領八代郡岩間村ニ而は、村内百姓并無宿共入交り百人余之もの共三夜迄河原江相聚り、夫食無之弥々出金貢等無之バ打こわし乱坊ニ可及体、名主太兵衛外屯人訴出候間其もの共も留置候而、手早く支度いたし手馴候鉄鉋打拾八人其外手附手代人足等凡六七拾人押懸ケ、日暮を相待岩間村江押寄候処、未多勢之もの不寄集処故、家々江押込多勢召捕夫々於場所吟味仕候処、翌朝迄ニ追々頭取共とも召捕吟味仕候処、無宿も入込罷在中ニは年来之悪党共有之、此節御仕置伺中之ものも御座候事、然ル処右村方ニ而吟味仕居候処、猶又巨摩郡大塩村ニ茂諏訪之森江多勢押寄、是亦追々里方江も可押出趣注進ニ付、岩間村ニ而召捕候百姓共無宿共百人余鹹沢村迄相送り、右大塩村江出張仕候而不残召捕、是又七八拾人之もの同様鹹沢村江引取候途中大柳川小柳川と申ス武瀬川越之場所所有之、同所江は孫三郎立居手当

天保甲州郡内騒動の諸断面 (藤村)

二七六

縄付、無程同村酒造稼いたし候太右衛門清左衛門江利害申聞、難渋之百姓共故かゆニ而もたへさせ宿といたし候様、尤囚人之事故酒造明蔵江一同入置番人は足輕を附置候趣申渡、其上召捕候人数江は心得違さへ無之ハ御慈悲は有之段利害申聞、同夜明蔵江留、翌日市川陣屋江引取候而夫々吟味之上、先ツ頭取人は入牢、夫々已下は手鎖宿預ケ、残ル多勢は皆々村預ケ申付置候、(中略) 又々下モ川内領巨摩郡福士村同垣之上村ニも同様騒立御座候処、是は役所江訴出候程之義無之故、私共始メ一同不存所」

(49) 甲府市坂田家文書

(50) 竹原田藤兵衛は「甲斐国民起奮記」には「蔵宿札差大福人」とある。天保七年「御用日記」九月九日の条には、藤兵衛は質屋渡世で質物は全部焼失した。町方の方の入主には火盗鼠喰は置主損の質屋仲間議定前書を理由に断っている。武家方で家来、町方出入人名義の場合も同様にする積りであるが、実地の予想がつかないから「右程之掛合無之様御仁恵之程願上」ている事実がある。

(51) 天保七丙申歳「御用日記」八月二三日の条には「翌廿五日相鎮候当日御役所ニ而徒党乱坊之者共百拾五人被召捕先牢内江被差遣候、甲府御代官井上十左衛門殿役所江被召捕候人数凡三百人程、市川御代官江人数百人程、被召捕有之候由」とある数字に大略似合う。従って石和代官所、田安・清水陣屋の召捕人数を加算しなければ正確な人数は不明

である。つぎに「今廿三日四ツ時頃何方之者ニ候哉凡四百人程徒党之者共山崎辺迄押来候段注進有之」とあるから甲府押入の人数もなお考証の余地がある。

(52) 山梨県立図書館蔵

(53) 「右囚人四拾式之内無宿拾四人」とあるが名前は四人であるから、四人とした。

(54) 竹川「前掲稿」三七〇九頁に掲載されている。

(55) 打毀については「甲斐一揆騒動実録」には二五四軒、「甲斐国天保騒動見聞録」では三三七軒余が記るされている。

民間の流布本であるから若干の問題はあるが参考迄に記しておく。なお焚出などについては、前者は「一軒五村、後者は「二三人三村」となっている。

(56) 甲府市坂田家文書

(57) 山梨県立図書館蔵

(58) 江川家文書。以下この江川の行動について、この節では本文書については註記しない。

(59) 本史料と大略同文のものが戸羽山瀚編「江川坦庵全集」上巻江川坦庵伝記六六〇九頁に収載されている。これについて編者は「英竜は、甲州暴徒鎮定後の天保八年三月、齋藤弥九郎と共に刀剣行商人に扮して、甲武相三州の地を微行し、管下の民情と属吏(英竜内偵書、松本斗機蔵書簡)の動行を精査した。同月、勘定奉行え提出した上申書には、当時の社会相が刻明に記録されている」(六六頁)と

している。私の引用した江川家文書の史料には「私支配所 武蔵相模伊豆駿河国」とあり、全集本は「私支配所、武蔵、相模、伊豆、駿河、甲斐国」となっている点問題がある。甲武相三州の徴行すると文中に駿豆が出て来る点はどうなるのか、表題は「支配所治り方之儀申上候書付」である。現在の処では、猶考証の余地があるのではないだろうか。また徴行の時期は推測の域を出ないが、私には天保八年か、甲州の代官になった天保九年かは、なお考証の余地があるのではないかと思はれる。

なお南梁小宮山綏介編「徳川太平記」第拾篇文恭院家斉公下一三九―四〇頁には英竜について、次のように記述している。「江川太郎左衛門英竜は是よりさき竊に甲州に入てその形勢を巡覧せしに他支配のことゆゑ絶て知るものなし乱起るに及て命を受けその鎮撫に従事せしが措置宜きを得て一揆立どころに静りしは予め其用意ありしが故なり英竜命を受けて発せんとする前夕深更に門を敲くものあり従者みな寝に就きしゆゑ英竜自ら起て戸を啓けは劍客齋藤弥九郎なり云く君が命を受けて甲州の乱を鎮むるを聞き微力を致さんが為に来りしとあるに英竜悦び俱に発せしとなり」と。これは問題になる点が多いだろう。

さて英竜は齋藤弥九郎宛松本斗機書状によると都留郡では「節句前紙幟ニ世直し江川大明神と記し所々之神社え建置」（「江川坦庵全集」上巻七〇頁）かれ、江戸では「水府天保甲州郡内騒動の諸断面（藤村）

杯已而者別而御評判宜敷」（同上）六九頁）いようである。天保九年三月甲斐国都留郡下和田村の仕立屋宗兵衛の「飢饉申上書」（「甲斐国都留郡内一揆関係資料」一五頁）もこの事を裏付けている。つぎに昭和三八年には手塚寿男氏によると、「たまたま聞きとりの相手になってくれる古老も、声をひそめて憚りながら語るといふ状態にいまなお置かれている」（「天保騒動の郡内局面」）「甲斐史学一八・一九合併号四二頁」という事実がある。

英竜は生前既に「一世の豪傑」（石黒忠晴、懐旧九十年一六頁）として著名であったが、明治二四年旧幕代官手代、八州取締宮内公美は「旧事諸問録」で、英竜についての「仕入みはよほど違いましたか」「手附手代の風は、少しは違ひませぬか」などの質問に対して、「やはり並のごさいます」「別に違ひませぬ」「一般手附手代とも同様でございます」（「青蛙房刊二五二―三頁」）と答えている。私は英竜の郡内騒動の際の行動は、代官としての一般的な範囲内でのものと考えたい。

(60) 「江川坦庵全集」上巻六四―五頁

(61) 「同右」六六頁

(62) 「同右」一二頁

(63) 原島陽一「代官手代の不正調査―『内札御用留』より」（文部省史料館報五号八頁）参照

(64) 「統徳川実紀」第二篇（新訂増補国史大系四九巻三五八

(65) 「甲斐叢書」二卷四九五～五二七頁。本史料は山口栄藏氏から借覧した。記して感謝したい。

(66) 「甲騒落去」については増田広美氏が「判決からみた郡内騒動—甲騒落去を中心して—」という研究発表を昭和三年にされたそうであるが、残念ながら私は成果を入手していない。(竹川「前掲稿」四〇頁)

(67) 竹川「前掲稿」四〇頁

(68) 「甲斐国都留郡郡内一揆関係資料」六七～八九頁

(69) 「同右」一〇二頁

(70) 南梁小宮山緩介編「徳川太平記」拾篇一三九頁には、「一揆の輩は礫四人、死罪九人、遠流三十八人、重追放八人、入墨中追放一人、中追放五人、江戸十里四方追放一人、所松廿三人、入墨重敵二人、入墨敵三十九人、敵三十人、手鎖六十四人、過料百廿九人なり其余村々名主長百姓組頭まで皆々それ／＼に誦責ありき」とある。

(71) 仰渡について全部ではないが、記載しているものに小野武夫編「徳川時代百姓一揆叢談」下巻(二八九～三五五頁)所収「郡内騒動」がある。解題では山梨県東八代郡一宮村小学校長水上文淵氏蔵本となっているが(七頁)、内容からすれば成立地は中巨摩郡か西八代郡と考えたい。御仕置については第三八重役人衆、第三九手附手代、第四〇口留番人、第四一与力同心は「甲騒落去」と内容が合致するが、

第三七極罪、第四二頭取人、第四三徒党同類、第四四諸処分は合致しない場合が多い。例を挙げると第四二では犬目村宿兵助は礫となっているが、彼は逃亡して捕えられていないので「甲騒落去」には見当らない。(増田広美「犬目村の兵助について」甲斐史学六号参照) また黒野田宿名主泰順は「存命に候はば重死罪」とあるが、これは「中追放」になっている。第四三では元西村貞太郎御代官所井尻帯刀とあるが、これは田安領依田帯刀でなくてはならない。私は法制史の智識が乏しいので断定は出来ないが、本史料はこの点では尚考証の余地がありそうである。

(72) 三溝村については「信濃国十郡高附帳」(信濃史料叢書第三五・七九頁)参照。松本の西方、梓川の南岸、野麦街道ぞいの村である。

(73) 刑罰については石井良助「日本法制史概説」四九三～九頁参照

(74) 幕末の農村については有泉貞夫「養蚕地帯の農業構造—山梨県を中心として—」(堀江英一編「幕末・維新の農業構造」一九一～二五二頁)参照

(75) 「櫛形町誌史料篇」(五二四)三七三頁

(76) 一〇カ村位置不明のため全部ではない

(77) 竹川義徳収集文書

(78) 同右

(79) 史料館蔵依田家文書



(80) 山梨県立図書館には「天保騒動一件之控」「甲斐国天保

騒動記」「甲斐国百姓大乱」「甲陽四震記」「甲陽騒動見聞記」などがある。「蔵書目録郷土資料編」第二集二〇頁

(81) 石井良助「日本法制史概説」四九四頁

(82) 「大日本近世史料 柳宮補任五」一〇五頁

(83) 「統徳川実紀第二篇」(新訂増補国史大系四九卷三四一頁)

(84) 史料館蔵井尻家文書「史料館所蔵史料目録」一三集

(85) 騒動吟味の触は「櫛形町誌史料篇」〔五〇五〕三六〇頁

参照

(86) 山梨郡西広門田村北組名主萩原周五衛の十一月一日付申上は依田家と同意旨であるが、米半俵程を焚出してゐる。

(87) 「甲騒落去」では吉五郎は石和で森であるが、「信資叢書」は山崎としてゐる。

(88) 葉山孫三郎の天保九年正月「去々申年八月又翌酉年十一月迄私儀市川陣屋詰中取斗候廉々荒増申上置候書取には、楠甫村浪人望月恒八について「此もの義浪人ニ而罷在年来名主をも相勤候事、支配所内ニも同様浪人御座候得共右類無之、浪人は地方江は携らず、作代を出し置候例、已ニ内藤隼人正様御懸リニ而御下知も御座候」とある。隼人正は文政二年三月、天保一二年六月の在職であるから、これ

天保甲州郡内騒動の諸断面(藤村)

は文政一二、天保八年の間の下知である。

(89) 文化一三年「去々年田畑高帳写」の持高は勘定帳系統の高であるから、「壬申御貢納勘定帳」と同系統の史料である。なお高帳写には一人、名前のみで高の記載のないものがある。集計に際して除外した。

(90) 依田泰八氏夫妻の御指示による。この点については、天保七年に御用金が掛っているが、「御用金名前帳」「御用金一件始終書留」依田家文書。この金額について本分家關係をみると、本家依田帯刀は分家長百姓周兵衛一〇〇両位、依田帯刀五両位が「得と相改」てみた金額とし、これに對して分家周兵衛は陣屋で「本家と同様致度」と申立てている。結局依田帯刀一二〇両、周兵衛一〇〇両であるが両家の意識と社会的評価を示している。

(91) 大升は甲州辨の事である。天保七年申正月依田良造「小作帳・未進帳」の小作には俵以下の斗・升は大升であり、下井尻村分小作は米で未の単位は使用しない。七日市場村分小作は俵で単位は斗・升でなく桶である。小作未進には大升、京升が混在しているが京升の方が多いようである。余りよくみていないが現在の処では、宝暦一三年「小作帳」の上割小作未進の項に八兵衛が寅田として京二升五合とあるのが早い例であり、「小作帳」では安永頃から多くなり寛政期には桶以下は殆ど京辨である。また井尻家文書の文化八年小作不納人五郎兵衛に対する出入では「去年年分不

納 地米六俵ト京式斗八升但三斗六升入」とある。また天保九年都留郡下和田村仕立屋宗兵衛の飢饉申上書（「甲斐国都留郡内一揆関係資料」二―三頁）の米、麦、小豆、ふすま、へえぬか、酒は京榊が単位である。甲州における甲州榊と京榊の関係は今後考えてみなければならぬだろう。

なお宝月圭吾「中世量制史の研究」（四六五―七頁）参照  
 (92) 依田家文書の享保一七子年「辛亥壬子年隠居領小作差引帳」には、「拾四俵式桶 小作引方 但シ老俵ニ半桶引」とあり、享保一六年依田与右衛門「小作帳」にも「但シ老俵ニ付半桶宛」とある。これは既に享保期から小作不作引がある事を示している。その際の具体的様相を示す史料は残っていない。しかし近藤康男「農業経済論」（改訂版六四―五頁）は、帝国農会『小作料減免に関する慣行調査』に基づいて「契約小作料が単に最高小作料であるのみならず、饑饉小作料であるから不作に際して減免を必要とするが如き小作農民の貧窮があるのである。即ち不作によって労賃部門に喰入る収入減が減免制度によって救はれてゐるのである。従つて契約小作料が低い場合には減免制度がない、殊に金納小作料に於いては軽減せざることを普通とする事例が尠くないし」とし、ついで不作程度と減免歩合に関する豊林省調査を紹介して「即ちたゞに減免が行はれるのみならず、大なる不作に対しては地主の負担割合が大

である」と指摘している。同様の指摘は大内力「農業問題改訂版」（二二四頁）にもあり、「多くのばあい小作農が地主に減免を申し入れ、（中略）その軽減率はあらかじめきめられているばあいもあったが、多くはそのばあいごとに交渉によつてきめられた。（中略）減免慣行によつて、地主は小作農の経営の危険の一部分負担していたわけであり、定額小作制も多少とも刈分け的色彩を帯びることになっていた。しかもこの減免におうずるか否か、またどのくらい減免するかは、いわば地主の慈悲ないし温情にぞんずることにもなっていたから、それだけ小作農の地主にたいする従属意識も強くならざるをえなかった」としている。

(93) 米俵は二斗二升、二斗六升、二斗七升、二斗八升、稀に八升五合、一斗五升七合五勺、一斗四升などがある。

(94) きだ・みのる「にっぽん部落」（岩波新書）三五―四二頁参照

(95) 安永七年山梨郡西高橋村の場合では、長百姓に百姓代のものが役入りし、百姓代は「五人組頭之内6格年ニ老人宛罷出相勘」としている。（史料館蔵町田家文書）

(96) 都留郡上花咲村の場合には天保九年「議定連印帳」によると、「右六人者、別段自分宅におひて申付、無是非罷出」とあり、村役人との個人的な色彩で参加している例がある。また天保七年都留郡下花咲村「騒立一件入用割賦取立

帖」では一同不本意の参加としながらも、「乍然御召捕に相成候者共御吟味中御差添御心添被下度頼申し候、然上者御役人申請入用並御召捕に相成候者共入用共、何程相掛り候而も左之連印之者に而引受」とし、また上・下花咲、下谷村の三カ村間でも諸入用についての議定書をかわしている。(甲斐国都留郡郡内一揆関係資料)五〇、二、六五、六頁)

(97) 飯田文弥「嘉永七年三郡村々酒造質屋水車稼人書上帳について」甲斐史学一一号四八、六〇頁頁参照

(98) 大石久敬「地方凡例録」巻七には、「甲州ニハ武田家ノ浪人、當時民間ニアル類、由緒アリテ古来ヨリロウ人相立、農業ヲ營、苗字帯刀ニテ住居イタス者多シ、其内ニハ御朱印或ハ除地等致所持ニ家柄ノ者モアリ、簡様ノ類美濃、近江等ニモアリ、和州吉野郡ニハ往古ヨリ有之、其外国々ニモ稀ニハ有之、尤關東ニハ少シ」(日本經濟大典)四三巻四一六頁)とある。

(99) 「牧民金鑑」下巻一七一、二頁。この種の浪人については「牧民金鑑」下巻一六八、七三頁、石井良助「江戸時代漫筆」二五五、六頁参照

(100) 史料館蔵依田家文書

(101) 「甲斐叢書」二巻五〇四頁

(102) 「同右」五〇七、八頁

(103) 「郡内騒動」(「徳川時代百姓一揆叢談」下巻)三一、二

天保甲州郡内騒動の諸断面(藤村)

七頁、「甲斐国天保騒動見聞録」

(104) 「御触書請印帳」(史料館蔵秋山家文書)「史料館所蔵史料目録」一三集所収)

(105) 「被仰渡書請印帳」「御触書小前請印帳」(秋山家文書)

(106) 山梨県立図書館蔵

(107) 「御触書村方請印帳」(秋山家文書)、なお「櫛形町誌史料篇」(五〇五)三六〇頁参照

(108) 「水戸藩史料別記巻三八七、八頁。水戸藩がこの様に幕府政治に封事をする意識については、尾藤正英「閉ざされた日本」(大世界史一六 文芸春秋社版)三五四頁参照

(109) 天保七年井尻家持高は井尻源三高六石八斗四升が知られているが、隠居分などを考えると尚考証の余地がある。同家の持高推移は次表の通りである。少なくとも幕末には持高は減少している。なお「甲斐国志」巻之百四十庶部第三井尻源三(「甲斐志料集成」六巻三三四、五頁)を参照。

石	24.6877
元禄13	
正徳 3	44.8623
享保13	42.2442
延享元	31.9711
寛政 8	42.5116
文化12	31.0743
天保11	15.4844
安政 2	16.4460
慶応元	21.9507
明治 6	20.5688

(110) 幸田成友解題「俵ふるひ」三田学会雑誌四一巻一・二合併号二九頁。なおこの問題については「御触書天明集成」

天保甲州郡内騒動の諸断面（藤村）

（三〇四三）九〇二—三頁参照

（III）目塚茂樹編「世界の歴史—古代文明の発見—」（昭和  
三十六年中央公論社版）二一九頁

#### 追記

本稿は昭和四三年度総合研究「江戸幕府代官領の総合的研究」の報告の一部をなすものである。鈴木寿、手塚寿男の両氏から種々御教示をいただいた。史料の閲覧を許可された山梨県立図書館、東京大学法学部法制史資料室、江川文庫、坂田季吉氏、竹川義徳氏、また調査にさいして便宜を賜った伊東弥之助、石井紫郎、有泉貞夫、清雲俊元、依田泰八の諸氏に感謝します。なお竹川義徳氏は昭和四三年暮に亡くなられた。紙上をかりて謹んで御冥福を祈る次第である。

#### （補）

郡内騒動の処罰者について、北島正元氏は「逮捕者千百余人のうち五六二人が磔、以下罪状に応じて処罰をうけた。また甲府勤番支配と代官五人も逼塞を命ぜられた」（日本の歴史18 幕藩制の苦悶「四一五頁」とし、遠山茂樹氏は「参加者五万人、逮捕者一、一〇〇人におよび、五六二人が磔刑に処せられる」（明治維新と現代「九二頁」とされている。両氏の典拠は明らかでないが、増田広美「犬目村の兵助について」甲斐史学六号五三頁には「千百余人が捕えられ、内五百六十二人が磔以下の処罰を受ける」とあるので、推測の域を出るものではないが、ここら当りから生れたのではあるまいか。

また北島氏は、江川太郎左衛門英竜が騒動に際して「英竜は部下二十余人をしたがえて武州八王子に出張し、一揆の一隊を鎮圧したが、そのさい親友の剣客斎藤弥九郎にたいし、幕府の鉄砲方井上左太夫から鉄砲を借りたので配慮してほしいと申し送っている」（前掲書「四一六頁」とされている。氏が典拠とされたのは、八王子出張は「江川坦庵全集」上巻六二頁の羽倉外記賛成書、鉄砲借りは同書六五—六頁の七月晦日付斎藤弥九郎宛江川太郎左衛門書状ではないかと推測される。若しそうだとすると、前者には「支配所武相州え甲斐徒党人乱入可致趣申参候節茂、同人儀即日輩山山出立仕り、譜代之手代家来共都合二十人、鉄砲十挺為持、武州八王子宿え出張仕り候」とあり、必らずしも一揆との衝突を意味する訳けではないように思われる。後者については、江川書状を同書編者は天保七年としているが、同年七月晦日は騒動勃発以前である。つだに、文中に「此節甲州支配被 仰付候折柄」とある。英竜の甲州支配は天保九年であるから、九年とすれば騒動は鎮圧されている。従って八王子出張と鉄砲借出しは無関係であるように思われる。

